秋田県仙北郡仙北町高梨字田茂木野一番
仙北町公民館内
秋田県埋蔵文化財調査事務所

秋田県文化財調査報告書第50集

中台遺跡発掘調査報告書

1978・3

秋田県埋蔵文化財センター

秋田県教育委員会

序

国営能代開拓建設事業は，東北農政局能代開拓建設事業所が主体となり，地域農業振興のため農用地造成をおこなうものであります。事業は昭和51年度から59年度まで計画されているが，当該地域に所在する周知の遺跡35か所のうち，本年度は「中台遺跡」の事前発掘調査を実施し，記録保存をはかることとしました。

本報告書が当地方研究の資料となり，又関係者各位の文化財愛護の一助となれば幸いです。

おわりに，調査ならびに報告書刊行にあたってご協力いただいた永瀬福男，川村正，能代市教育委員会の方々に深く感謝の意を表します。

昭和53年3月

秋田県教育委員会

教育長　**畠山芳郎**

目　次

Ⅰ　遺跡の立地と環境……3
Ⅱ　発掘調査に至るまでの経過……3
Ⅲ　調査の概要……4
　1　調査の方法……4
　2　調査の経過……4
Ⅳ　検出遺構と出土遺物……5
Ⅴ　遺構外出土遺物……24
Ⅵ　ま　と　め……29

第1図……遺跡の位置および周辺地形図……1
第2図……グリット配置図……2
第3図……A区第1号竪穴遺構……5
第4図……A区第1号竪穴遺構出土遺物……6
第5図……A区第2号竪穴遺構……6
第6図……A区第2号竪穴遺構出土遺物……7
第7図……A区第3号竪穴遺構……7
第8図……B区遺構分布図……8
第9図……B区第1号竪穴住居跡……9
第10図……B区第1号竪穴住居跡出土遺物……10
第11図……B区第2号竪穴住居跡と第3号竪穴遺構……12
第12図……B区第2号竪穴住居跡……13
第13図……B区第3号竪穴住居跡……14
第14図……B区第3号竪穴住居跡出土遺物……15
第15図……B区第4号竪穴住居跡……16
第16図……B区第4号竪穴住居跡出土遺物……17

第17図……B区第1号竪穴遺構……18
第18図……B区第1号竪穴遺構出土遺物……18
第19図……B区第2号竪穴遺構……19
第20,21図…B区第2号，3号竪穴遺構出土遺物……20
第22,23図…B区第4号竪穴遺構及び出土遺物……21～22
第24図……B区第1号製鉄遺構……22
第25図……A区遺構外出土遺物……23
第26図……A区遺構外出土遺物……24
第27図……B区遺構外出土遺物(1)……26
第28図……B区遺構外出土遺物(2)……27
第29図……B区遺構外出土遺物(3)……28

図版1……中台遺跡遠景，発掘前のようす……31
図版2……発掘調査風景，A区第1号竪穴遺構……32
図版3……A区第2号竪穴遺構，A区第3号竪穴遺構……33
図版4……B区第1号竪穴住居跡精査前，B区竪穴住居跡完掘…34
図版5……B区第2号竪穴住居跡と第3号竪穴遺構・第3号竪穴住居跡…35
図版6……B区第3号・第4号竪穴住居跡……36
図版7……B区第1号・2号カマドと第3号黄白色粘土……37
図版8……B区第1号・2号・4号竪穴住居跡遺物出土状態……38
図版9……B区第1号竪穴遺構……39
図版10……B区第2号・3号竪穴遺構……40
図版11……B区第1号製鉄遺構……41
図版12……A区・B区遺物出土状態……42
図版13……B区第1号・2号堅穴住居跡出土遺物……43
図版14……B区第3号・4号，A区第1号・2号出土遺物……44
図版15……B区第1号・2号・3号・4号竪穴遺構出土遺物……45
図版16……A区遺構外出土遺物……46
図版17……B区遺構外出土遺物(1)……47
図版18……B区遺構外出土遺物(2)……48

遺跡の位置および周辺地形図　　1:50,000　能　代

中台遺跡　　遺物包含地

第　1　図

第 2 図

I　遺跡の立地と環境

中台遺跡は，秋田県能代市朴瀬字社地際中台41番地に所在する。同遺跡は，東雲台地の南縁に位置し，標高25 mを測る。

東雲台地は，数段の段丘によって構成され，米代川の北岸から北方に広がる。台地は，畑地，水田を中心とするさまざまの生産活動の場として利用されている。近年，藤里町の素波里ダムからの農業用水路の建設により，急激にその姿をかえようとしている。

眼下に米代川が流れる。奥羽山脈に源を発する米代川は，秋田県北部の降水を集め，日本海に注ぐ。遺跡付近は，下流にあたるため流れもゆるやかであり，沖積地をいくぶん蛇行しながら，東から西に流れる。遺跡から日本海までの直線距離は，6.5kmである。

米代川河口付近は，原始・古代から人々が生活したらしく，多くの遺跡が点在する。文献に登場するのも早い。すなわち，日本書紀によると，「斉明天皇4年（658）阿倍臣，船師180艘を率いて蝦夷征伐に向かったところが齶田，渟代二郡の蝦夷は，……」とある。

また，「続日本紀」（771年）には，渤海国の特使が，野代湊に漂着した記事があり，「三代実録」（878年）には，賊地としての野代や，朝廷側の野代営などの記載がみえる。これらの地名が，具体的にどこなのか，今後の研究をまたねばならないが，米代川河口付近であることは，まちがいないであろう。このように，国史に登場するほど，米代川河口付近は，開発が進んでいたものと推察される。

数多くある遺跡のうち，発掘調査された遺跡は，米代川北岸では金山チャシ[1]，八森坂[2]，平影野遺跡[3]があり，南岸では柏子所貝塚[4]，大館遺跡[5]がある。

II　発掘調査に至るまでの経過

1　調査の目的

国営能代土地改良事業は，東北農政局能代開拓建設事業所が主体となり進行中である。秋田県能代市朴瀬字社地際中台41の畑および水田30,540㎡もその対象となり，昭和51年一部着工し，52年度は本格的に工事が実施されることになった。とくに，同地域には主要導水管の埋設工事が計画されたため，幅約7 m，長さ320 mの範囲は，完全に掘りおこされることになった。この地には，中台遺跡が所在するため，事前調査を実施し，遺跡の性格解明と記録保存をはかることになった。

2　調査の要項

調査主体　秋田県教育委員会

調査期間　昭和52年8月9日～9月14日

調査地点　秋田県能代市朴瀬字社地際中台41

調査担当者　永瀬福男

調査補助員　小林鉄雄，千葉聡，平川美樹也

調査参加者　川村正，山田稔，佐々木信夫，芹田芳雄，芹田良雄，鈴木市郎，鈴木キノ，鈴木幸子，鈴木孫治郎，佐々木為三郎，佐々木愛子，芹田トキエ，芹田キセ，佐々木カツ，芹田清一，佐々木肇，七戸幸作，岩森みよ，工藤ゆき子，工藤ミヨ，鈴木キヨ，小野タイ子，鈴木ふみえ，斉藤アヤ子，桧田キミエ，川村いつ，神馬常太郎，伊藤秀次郎，蝦名百太郎，阿保セツ，笹森セイ子，棟方カツエ，工藤タミエ，蝦名キワ，神馬ヨシノ

調査協力機関

東北農政局能代開拓建設事業所

能代市教育委員会

調査事務担当

秋田県教育庁文化課　門間光夫　富樫泰時

III　調査の概要

1　調査の方法

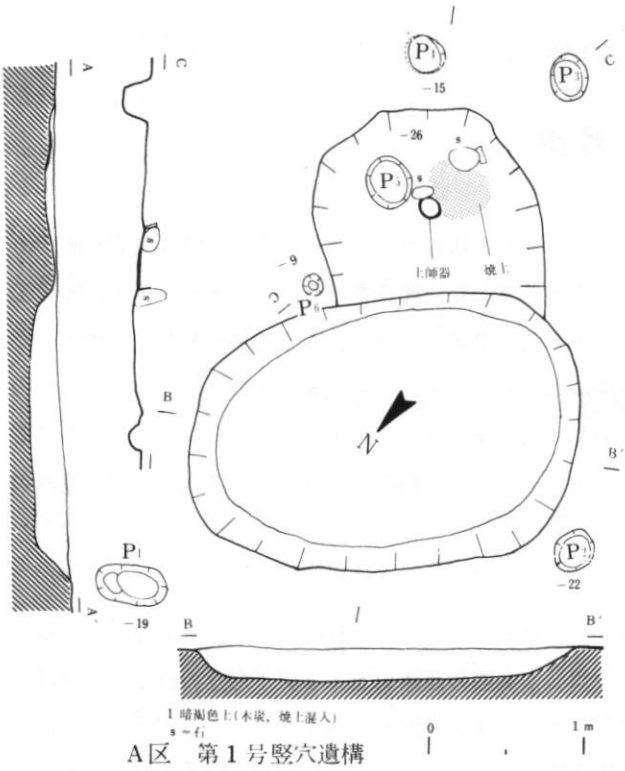
調査対象地は，東雲台地の南縁から南方にのびる舌状台地に所在し，その面積は3,750㎡である。この舌状台地のほぼ中央を北から南に第2号導水管が埋設される計画である。導水管埋設工事は，幅7m長さ320mにおよぶ。この工事予定線上に幅8m，長さ248mの発掘区を設定した。この発掘区をA区とした。また，台地の東縁にも発掘区を設定し，これをB区とした。いずれの発掘区とも2m×2mの区画で区切り，南北方向を算用数字で，東西方向をアルファベットで表現した。グリッドの名称は，算用数字とアルファベットの組み合わせで呼ぶことにした。遺構の実測は，すべて平板測量で実施した。

2　調査の経過

8月9日，東北農政局開拓建設事業所で打ち合わせを行なう。10時頃より導水管埋設予定線上の下刈りを行なう。8月10日，テントを設営し，発掘の諸準備をする。下刈りの終了した地域には杭を打ちグリッドを設定する。8月11日，A区の発掘を開始。第1，第2号竪穴遺構の一部が検出される。8月18日から第1号竪穴遺構の精査にとりかかり，8月19日に終了，写真撮影と実測を行なう。8月20日，第2号遺構を精査する。8月24日，第3号竪穴遺構検出，精査する。A区の写真撮影，実測を行ない，A区の調査を終了した。8月25日，B区はみょうが畑になってい

るため，みょうがを刈りはらいグリッドを設定する。8月26日，発掘調査を開始。第1号竪穴住居跡の一部が検出される。8月27日，住居跡の平面プラン判明する。8月28日，第1～3号竪穴遺構のプラン確認。8月30日から遺構の精査にとりかかる。9月2日，第1号竪穴住居跡の埋土層の実測。第2号竪穴住居跡の一部検出。9月3日，第1号竪穴住居跡の実測，写真撮影終了。第2号竪穴住居跡と第3号竪穴遺構が重複した状態で検出され，精査する。9月6日，第1，2号竪穴遺構の実測を行なう。9月7日，第2号竪穴住居跡と第3号竪穴遺構の実測を行なう。9月9日，第3号竪穴住居跡のプラン確認，精査する。9月12日，B区遺構分布図作製。9月14日写真撮影や補足調査を行ない，中台遺跡の調査を終了する。

Ⅳ　検出遺構と出土遺物



A区　第1号竪穴遺構

第　3　図

【A区】

舌状台地のほぼ中央を通る導水路予定線上にあたるA区での調査の結果，竪穴遺構3を検出することができた。

第1号竪穴遺構（第3図）

〔遺構の確認〕　60－c，60－b 59－c，59－dグリッドで検出された。遺構確認面は，表土下の地山上面である。

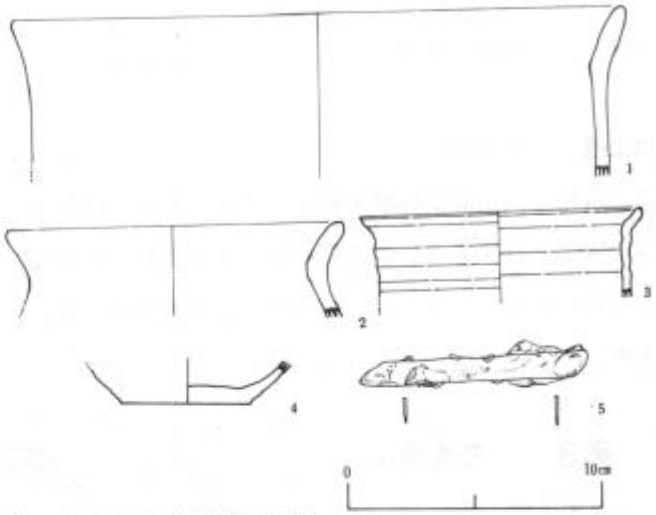
〔平面形〕　平面形は，惰円形を呈する。長径2.5 m，短形1.5 mを測る。

〔壁・床面〕　壁はなだらかに傾斜し，床面に続く。床面は，ほぼ平坦である。

〔柱穴〕　同遺構の周囲からは，6個の柱穴状ピットが検出された。

地山上面からの深さは，P_1 が19cm，P_2 が22cm，P_3 が17cm P_4 が15cm，P_5 が26cm，P_6 が9cmである。これらのピットが，この遺構にともなうものであるかどうかは不明である。

〔その他の施設〕　この竪穴遺構の南側は，わずかにくぼみ，床面は焼けている。焼土面の北側には，土師器甕形土器が定置されていた。



A区　第1号竪穴遺構出土物

第　4　図

出土遺物（第4図）

出土遺物は，土師器（甕形土器，杯形土器）と鉄製品である。

〔土師器〕　**甕形土器**（1～3）　1は，口縁部がわずかに外反する口縁部破片である。色調は，褐色を呈する。推定口径24cm。2は，口縁部が外反し，口唇部は丸く仕上げられている。推定口径13cm。3は，口縁部が内彎気味に外反する。内外面はロクロ調整され，凹凸が顕著である。色調は暗褐色を呈し，内外面に炭化物が付着している。推定口径11cm。

杯形土器（4）　4は杯形土器の底部破片である。ロクロ水挽き成形され，底部には回転糸切り痕が認められる。色調は赤褐色を呈する。底部径5cm。

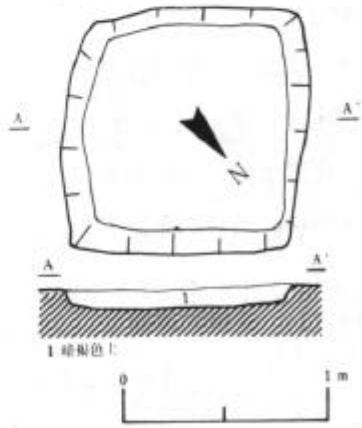
〔鉄製品〕　5は長さ9cm，幅1cm，厚さ0.1cmを測る。1側縁を薄く仕上げ刃部としている。刀子であろうか。

第2号竪穴遺構（第5図）

〔遺構の確認〕　79－a，79－bグリッドの地山上面で確認された。

〔平面形〕　方形に近い平面プランを呈している。

〔壁・床面〕　壁は45°くらいの傾斜で床面に続く。壁の上部は，ほんのわずか焼けている。床面は平坦であ



A区　第2号竪穴遺構

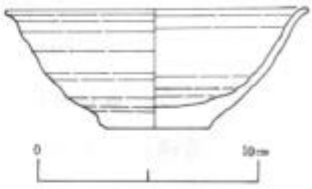
第　5　図

る。地山上面からの深さは7cmである。

〔柱穴〕　検出されなかった。

出土遺物（第6図）

出土遺物は，土師器杯形土器1点のみである。杯形土器は口縁部が外反する。ロクロ水挽き成形され，底部には糸切痕が認められる。口径13.5cm。底径4.7cm。器高5.4cm。



A区　第2号竪穴遺構出土遺物

第　6　図

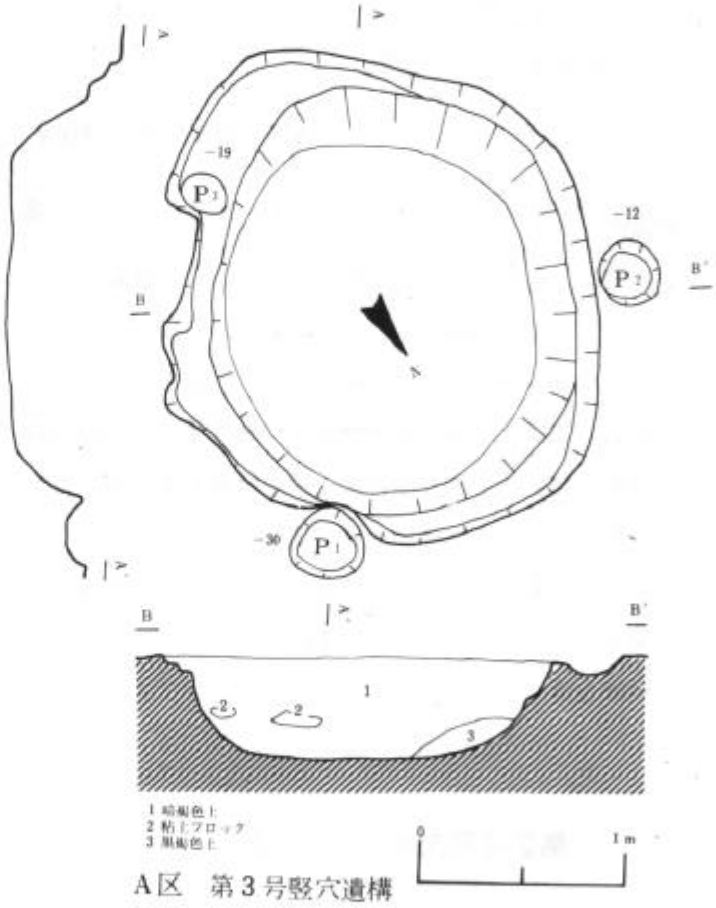
第3号竪穴遺構

（第7図）

〔遺構の確認〕　台地の先端部に位置し，108－b，108－c，108－d，109－b，109－c，109－dグリッドで検出された。地山上面で確認されたものである。

〔平面形〕　平面形は，円形を呈する。

〔壁・床面〕　壁はなだらかに床面に続くが，北壁，東壁，南壁上部には段がある。床面は，鍋底状を呈する。



A区　第3号竪穴遺構

第　7　図

〔柱穴〕　遺構の周囲に3個の柱穴状ピットが検出された。地山上面からの深さは，P_1が30cm，P_2が12cm，P_3が19cmであった。

出土遺物

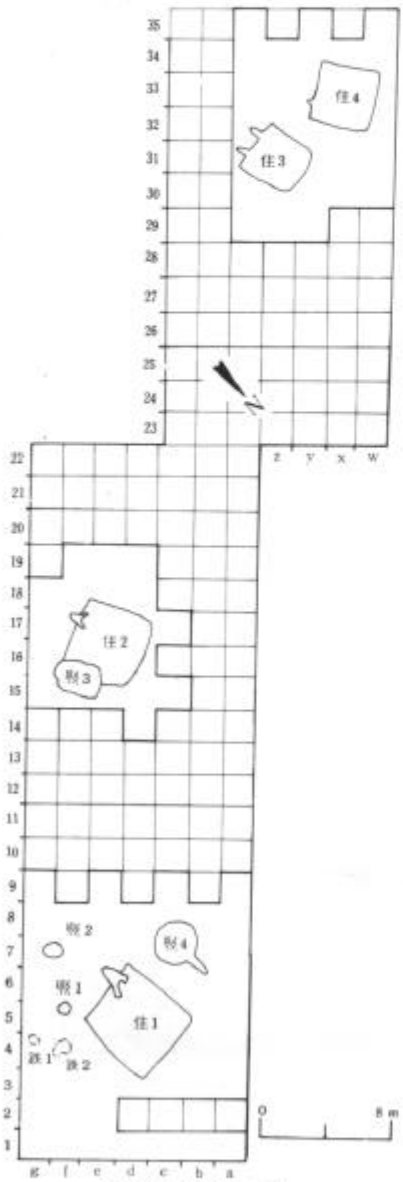
埋土中より土師器の小破片が出土したのみである。

【B区】

B区では，竪穴住居跡4，竪穴遺構4，製鉄遺構1が検出された。

第1号竪穴住居跡（第9図）

〔遺構の確認〕　3－d，4－c，4－d，4－e，5－b，5－c，5－e，6－d，6－eブリッドで検出された。遺構確認面は，地山上面である。



B区遺構分布図

第　8　図

〔平面形・方向〕　平面形は，長方形を呈するが，東側がわずかにふくらむ。長軸5.5 m，短軸4.4 mを測る。長軸方向は，N－20°－wである。

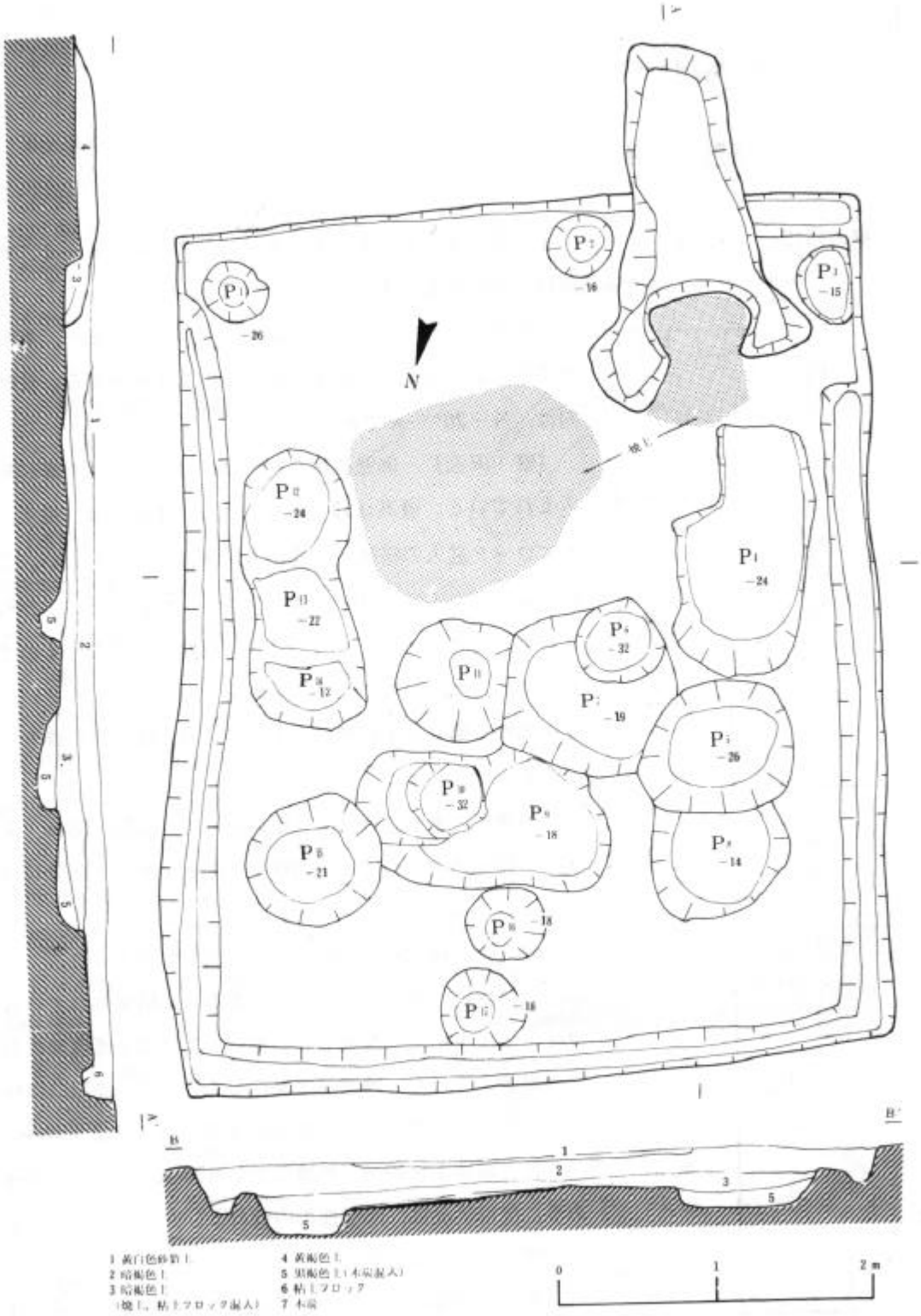
〔壁・床面〕　側壁の保存状態は良好で，ほぼ垂直に掘り込まれている。壁高は12cm前後である。床面には，焼土，粘土ブロック混入の暗褐色土を貼り，床面としたらしい。この貼り床の下からは，P_4，P_5，P_7～P_{16}のピットが検出された。これらのピットは，この住居跡にともなうものでなく，時間的に古いものと考えられる。なお，P_1～P_3，P_{17}は床面から掘り込まれていたものであり，住居跡に伴うピットであろう。

〔周溝〕　東壁，西壁，北壁に沿って，幅30～35cm，深さ10cm～15cmの溝がめぐる。西壁の一部と南壁の大部分には，検出されなかった。

〔柱穴〕　柱穴らしいピットは検出されなかった。

〔カマド〕　カマドは，南壁の東寄りに構築されている。カマド全体を粘土で構築しているが，焚口部と燃焼部の天井部は崩壊していた。煙道部は現存していたが，煙出口は検出できなかった。焚口部から煙道部までの長さは2 m40cm。袖部の最大幅は1 m40cm，燃焼部で1 m20cm，煙道部で70cmである。使用状況は，燃焼部の内壁および火床面が赤褐色を呈し，堅くしまっていた。

〔その他の施設〕　この住居跡にともなうピットは，P_1～P_3，P_6，P_{17}であるが，用途は不明である。床面から



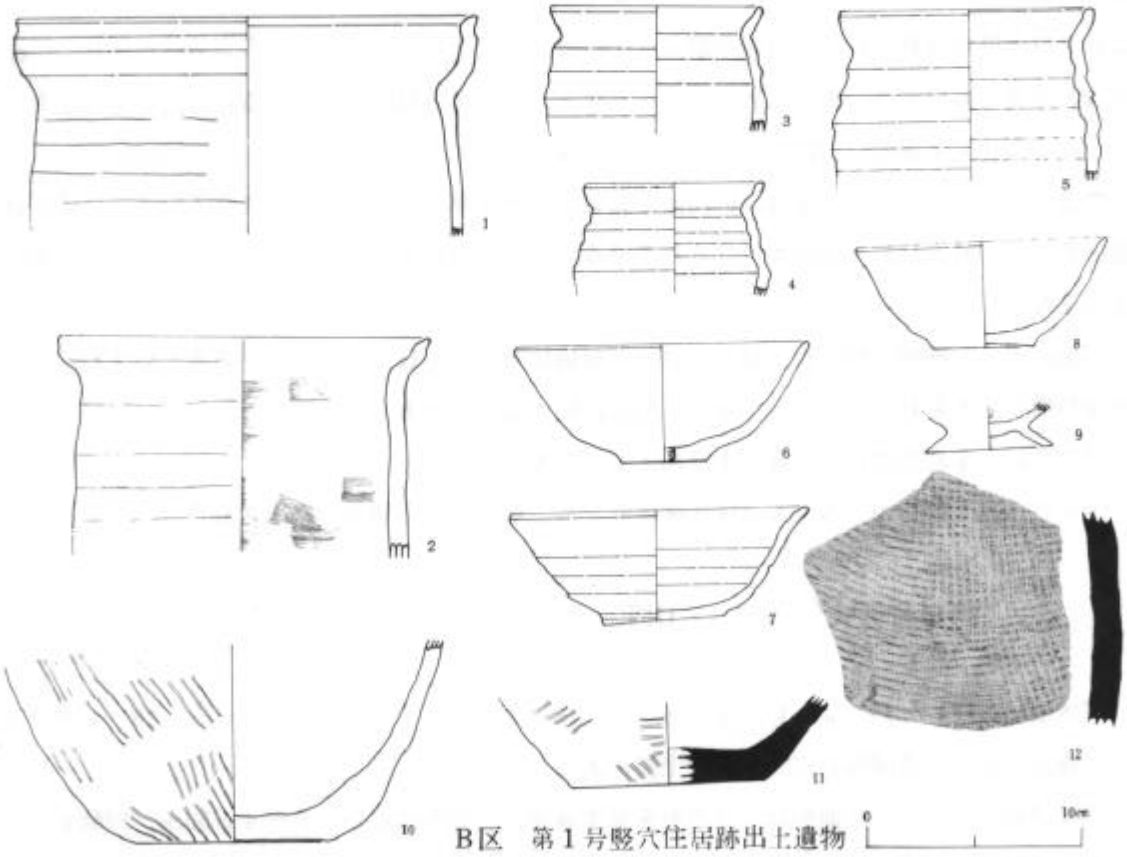
第 9 図　　B区　第1号竪穴住居跡

の深さは，P_1 が26cm，P_2 が16cm，P_3 が15cm，P_6 が32cm，P_{17} が18cmである。床面下のピットも性格は不明である。床面からの深さは，P_4 が24cm，P_5 が26cm，P_7 が19cm，P_8 が14cm，P_9 が18cm，P_{10} が32cm，P_{11} が20cm，P_{12} が24cm，P_{13} が22cm，P_{14} が12cm，P_{15} が21cm，P_{16} が18cmである。

出土遺物（第10図）

出土遺物は，土師器（甕形土器・杯形土器），須恵器（甕形土器），鉄滓などである。

〔土師器〕　**甕形土器**（1～5・10）　1～5は口縁部破片であり，10は胴部下半から底部にかけての破片である。1は推定口径21.5cmを測る。口縁部は，内彎気味に外反する。口辺部は直立し，器壁は薄くなる。口縁部外面にはロクロ痕が認められる。胎土に砂礫を含む。色調は赤褐色



B区　第1号竪穴住居跡出土遺物

第 10 図

を呈し，焼成はもろい。2は輪積成形されたらしく外面にその痕跡を有している。口縁部は内彎気味に外反する。内面にはハケ目痕が認められる。胎土には砂礫を含み，褐色を呈する。胴部外面には炭化物が付着している。推定口径17.5cm。3～5は小型甕形土器で，粘土紐巻上げ成形ののち，ロクロ調整したらしく凹凸が激しい。口縁部は「く」の字状に内彎気味に外反する。口唇部は丸く仕上げられている。いずれも灰褐色を呈する。5の内面には炭化物が付着している。推定口径は，3が10cm，4が8cm，5が12cmである。10は丸底風の甕の破片である。底径は8cmでわずかに上底になっている。底部から丸味をもって胴部へ移行する。外面にはタタキ目痕が認められる。色調は，外面が褐色，内面が灰褐色で呈する。胎土には砂粒を含む。

杯形土器（6～8）　6はロクロ水挽き成形されたと思われるが，ロクロ目痕ははっきりしない。底部切り離し技法も不明である。胴部は内彎気味に開く。色調は明褐色を呈し，焼成は良好である。口径13.5cm。底径4cm。器高5.5cm。7も成形，切り離し技法は不明である。胴部は内彎気味に開き，口縁部は外反する。赤褐色を呈する。口径13.5cm。底径5.5cm。器高5.2cm。8はロクロ水挽き成形され，底部切り離しは回転糸切り技法による。胴部は内彎気味に開き，口縁部はわずかに外反する。内面は放射状にヘラ磨きされ，黒色処理されている。外面は暗褐色を呈し，焼成は良好である。口径11.5cm。底径4.7cm。器高4.5cm。

高台付杯形土器（9）　9は，杯内面が放射状にヘラ磨きされ黒色処理されている。底部には高さ0.5cmの外方に開く高台が付けられている。杯部上半は欠損しているが，焼成は良好で褐色を呈する。

〔須恵器〕　**甕形土器**（11，12）　11は底部破片であり，12は胴部破片である。いずれにもタタキ目痕が認められる。青灰色を呈し，焼成，胎土は良好である。

〔鉄滓〕　多孔質の鉄滓小塊が1点出土している。

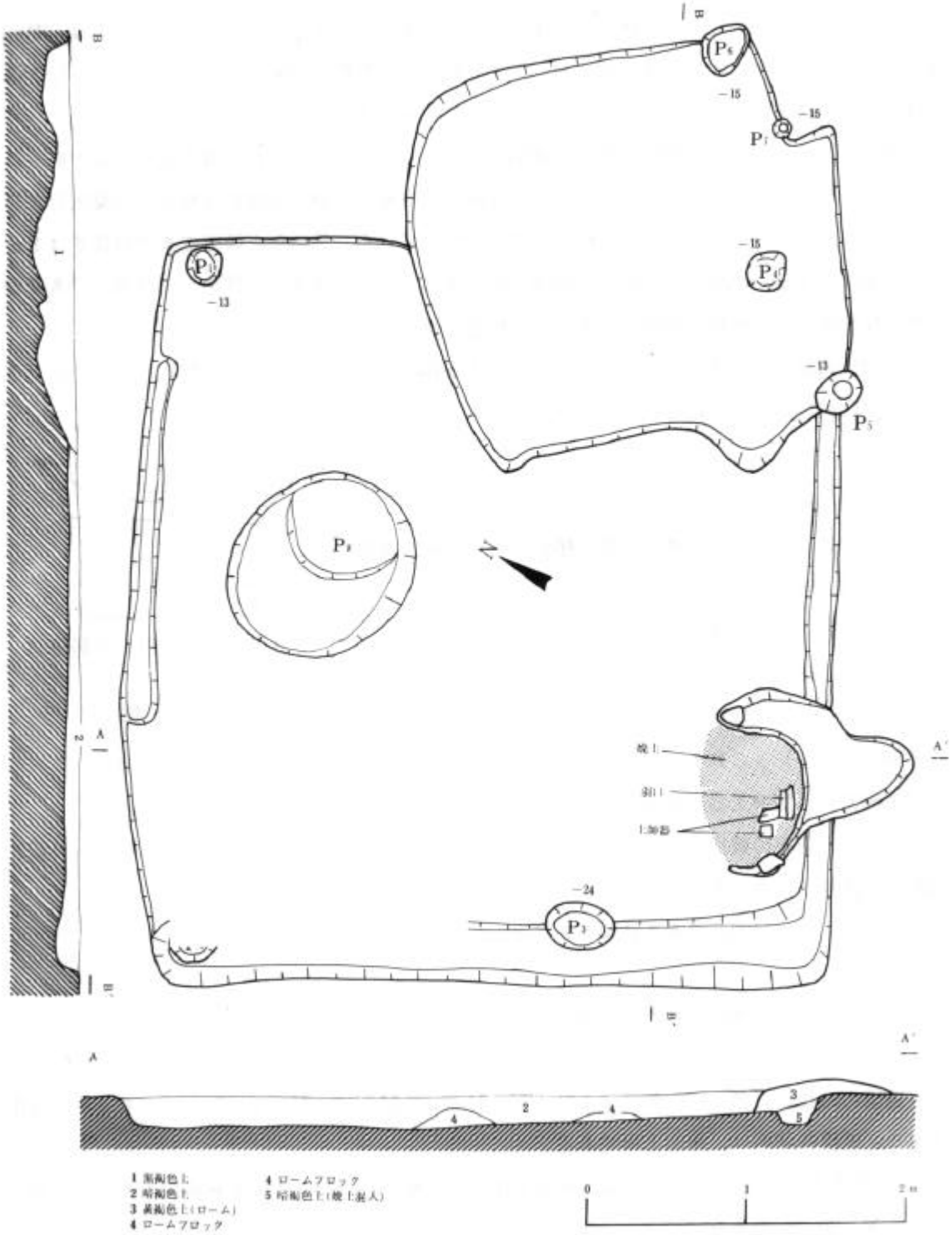
1～12の出土遺物のうち，6は住居跡床面から，他は埋土下層から検出された。

第2号竪穴住居跡（第11図）

〔遺構の確認〕　15－e，16－f，16－e，16－d，17－f，17－d，18－f，18－eグリッドで検出された。遺構確認面は，地山上面である。

〔平面形・方向〕　平面形は，長方形を呈するが，正方形に近い。長軸4m50cm，短軸4m40cmを測る。長軸方向は，N－60°－Eである。

〔壁・床面〕　南壁と東部の一部が，第3号竪穴遺構に切られ消滅している。壁は垂直に掘られている。床面は平坦である。



B区　第2号竪穴住居跡と第3号竪穴遺構

第 11 図

〔周溝〕　西壁に沿って，幅45cm，深さ5cmほどの溝が掘られ，南壁には幅20cm，深さ10cmほどの溝がめぐる。北壁の一部にも周溝状の掘り込みが認められる。東壁には存在しなかった。

〔柱穴〕　住居跡にともなう柱穴は，P_1～P_4である。いずれも住居跡内に存在する。P_1，P_2，P_4はコーナーに掘り込まれ，P_2はコーナーから北寄りに掘られている。床面からの深さは，P_1が13cm，P_2が20cm，P_3が24cm，P_4が15cmである。

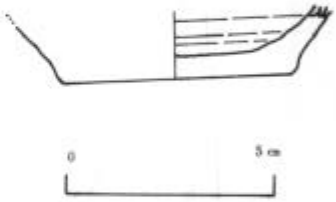
〔カマド〕　カマドは，南壁西寄りに構築されている。カマドの下には溝が走り，溝が掘られてから，カマドを構築している。カマド本体は粘土で構築し，袖部先端には整形した凝灰岩を芯材として使用している。焚口部と燃焼部天井は崩壊していた。焚口部と煙道部までの長さは1m30cm，袖部幅1m，燃焼部最大幅1m20cm。煙道部はだんだん狭まる。煙出し口は確認できなかった。使用状況は，燃焼部内壁，火床面は赤褐色に焼けていた。

〔その他の施設〕　床面北側中央部には，径1m10cm，深さ20cmほどの円形のピットが検出されたが，用途は不明である。

出土遺物（第12図）

出土遺物には，土師器（甕形土器，杯形土器）破片，須恵器破片，羽口破片，鉄滓がある。

〔土師器〕　**甕形土器**（2）　小破片であるため図化できなかった。口縁部は外反し，口唇部は平坦である。色調は，灰褐色を呈し，焼成はよくない。



B区　第2号竪穴住居跡

第　12　図

杯形土器（1）　これも小破片であるが，底径5.5cmで，回転糸切り痕が認められる。

〔須恵器〕　甕形土器の胴部破片が一点出土している。

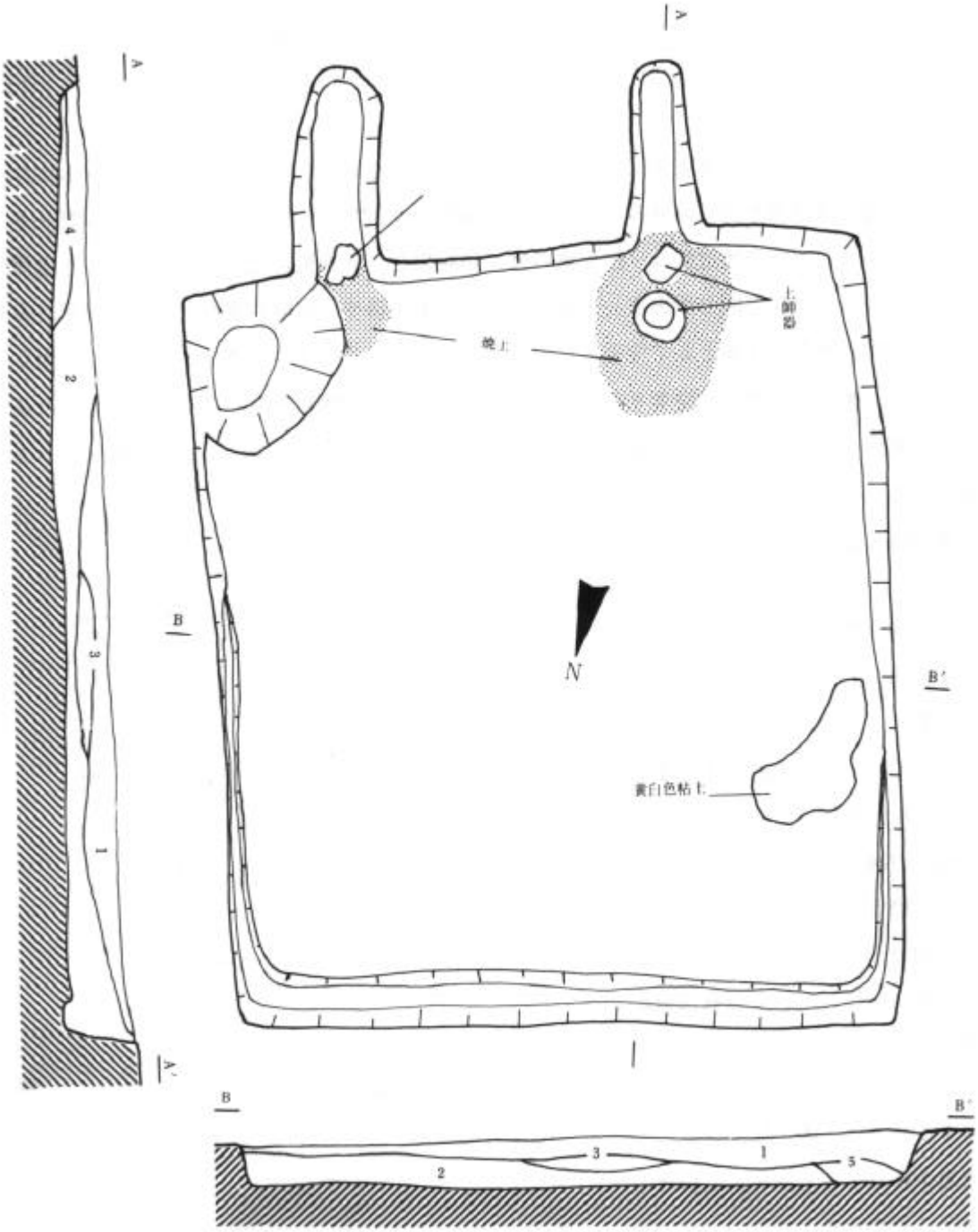
〔羽口〕　羽口の破片が3点出土している。2点は方形，1点は円形を呈するらしい。外面に溶融した鉄滓が付着したものもある。

〔鉄滓〕　表面に凹凸のある鉄滓が2点出土した。

第3号竪穴住居跡（第13図）

〔遺構の確認〕　30－a，30－z，30－y，31－a，31－z，31－y，32－zグリッドで検出された。遺構確認面は，地山上面である。

〔平面形方向〕　平面形は，長方形を呈する。長軸3m15cm，短軸2m85cmを測る。長軸方向は，N－20°－wである。



1　暗褐色土
2　暗褐色土(粘土ブロック混入)
3　暗褐色土(木炭混入)
4　黒褐色土(焼土混入)
5　黄白色粘土

0　1m

B区　第3号竪穴住居跡

第 13 図

〔壁・床面〕　壁は，ほぼ垂直に掘り込まれ，床面に続く。床面は平坦である。なお，西壁に近い床面上には，黄白色粘土が検出された。

〔周溝〕　東壁の中央部から，北壁に沿って西壁の途中まで溝がめぐる。溝の幅は10cm～25cmで，深さは5cmほどである。

〔柱穴〕　存在しなかった。

〔カマド〕　南壁にカマドと考えられる遺構が2カ所検出された。いずれも，カマド本体は存在せず，火床面と煙道部が認められるだけである。東側の煙道部は，住居跡の外に80cmのび，その幅は35cmである。西側の煙道部は，住居跡の外に70cmのび，その幅は25cmほどである。煙道部の深さは，床面のレベルと同じである。火床面上では，須恵器や土師器の甕形土器の底部が，ふせた状態で検出された。支脚として使用したのかもしれない。この2つのカマドは同時に使用したものでなく，東側のカマドが廃棄されたのち，西側のカマドを構築使用したものと考えられる。それは，東側の火床面がピットによって切られていることや西側の火床面の保存状態が良いことなどによる。

〔その他の施設〕　南東コーナーで P_1 が検出された。深さは24cmである。

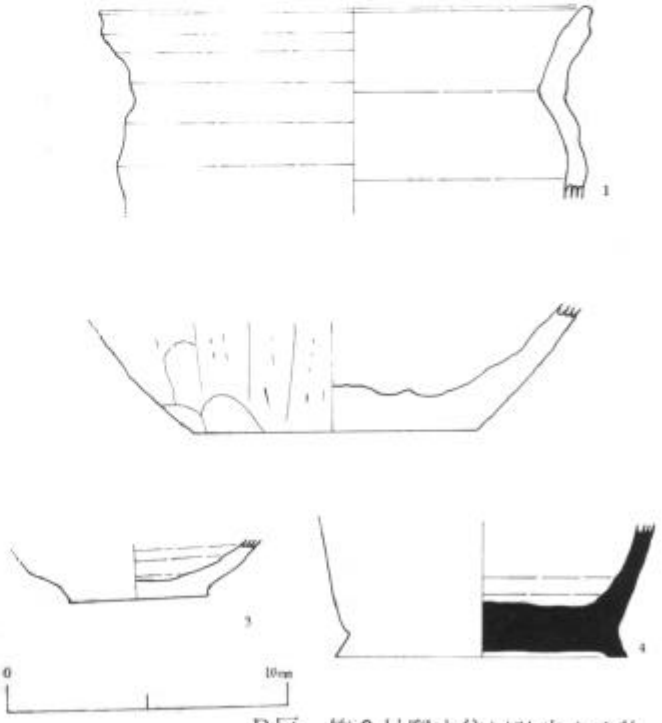
出土遺物（第14図）

出土遺物は，土師器（甕形土器，杯形土器）と須恵器である。

〔土師器〕　**甕形土器**（1・2）

1は口縁部破片である。輪積成形ののち，口縁部をロクロ調整している。暗褐色を呈し，胎土には砂粒を含む。内外面には炭化物が付着している。推定口径17cm。2は底部破片であり，底径10cmを測る。外面にはヘラ削り調整を施している。暗褐色を呈する。カマド内で底部を上にして検出されたところから，支脚として使用したのかもしれない。

杯形土器（3）　3は杯形土器であるが，胴部上半を欠損している。



B区　第3号竪穴住居跡出土遺物

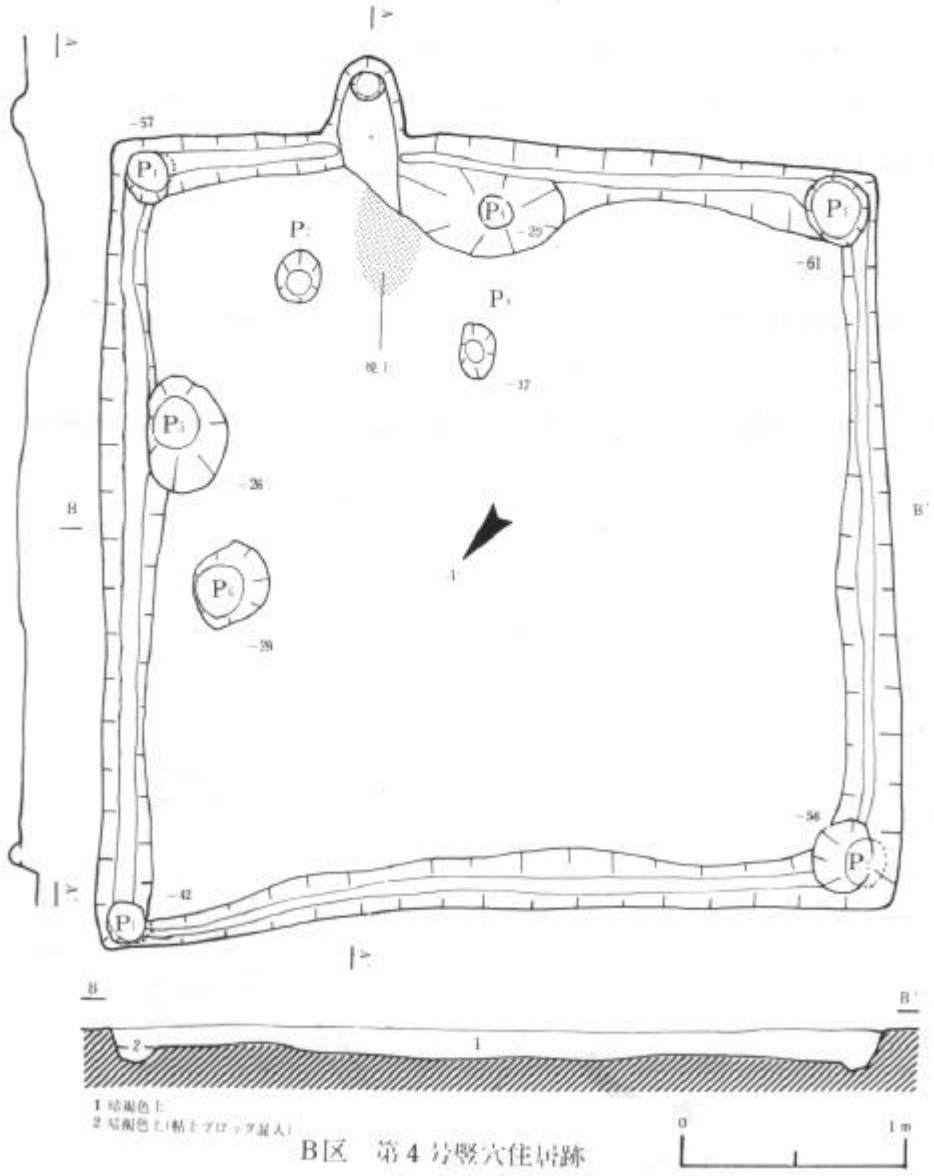
第 14 図

ロクロ水挽き成形され，底部には回転糸切り痕がみられる。灰褐色を呈する。底径5cm。

〔須恵器〕　4は，甕形土器の底部であろうか。外方に開く底い高台が付けられている。高台径10cm。青灰色（部分的に黒色）を呈し，焼成は良好である。カマド内で底部を上にした状態で検出された。

第4号竪穴住居跡（第15図）

〔遺構の確認〕　32－y，32－x，32－n，33－y，33－x，33－w，34－x，34－xで検出



第　15　図

された。遺構確認面は，地山上面である。

〔平面形・方向〕　平面形は，正方形に近い長方形を呈する。長軸3 m50cm，短軸3 m40cmを測る。長軸方向は，N－46°－Eである。

〔壁・床面〕　壁高は10cmほどで垂直に操り込まれている。床面は，ゆるやかな凹凸をなし，高壁近くが高くなっている。

〔周溝〕　4辺の壁に沿って溝がめぐる。溝の幅は20cm～30cm，深さは5 cmほどである。

〔柱穴〕　各コーナーに配置されたP 1～P 4 が柱穴である。P 1 が42cm，P 2 が56cm，P 3 が61cm，P 4 が57cmである。

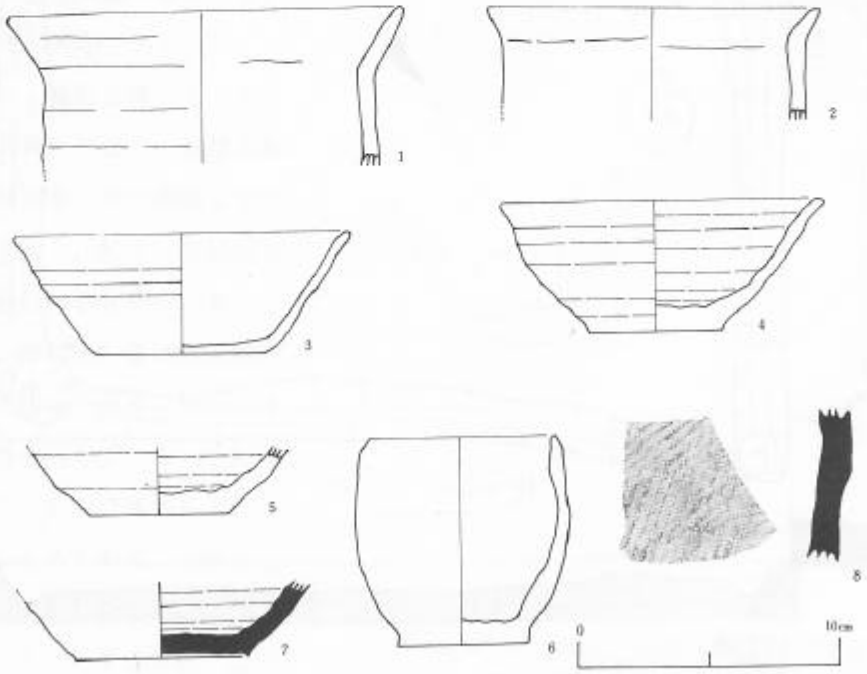
〔カマド〕　南壁にカマドらしき痕跡はあるが判然としない。

〔その他の施設〕　南壁中央近くに，深さ20cmほどの P 9 があり，東壁近くには深さ26cmのP5と深さ29cmの P 6 がある。用途は不明である。

出土遺物（第16図）

出土遺物は，土師器（甕形土器・杯形土器・コップ形土器）と須恵器（椀形土器・甕形土器）である。

〔土師器〕　**甕形土器**（1，2）　いずれも口縁部破片である。内外面には輪積み成形と思わ



B区　第4号竪穴住居跡出土遺物

第　16　図

れる接合痕が認められる。1は灰褐色を呈し，粗末な作りである。2は内外面に炭化物が付着している。推定口径は，1が15cm，2が12.5cmである。

杯形土器（3～5）　3～5ともロクロ水挽き成形され，底部には回転糸切り痕が認められる。3の胴部は直線的に外方に開く。色調は褐色を呈し，ていねいな作りである。口径12.5cm。底径6.5cm。器高4.5cm。4の胴部は内甕気味に開く。内外面に炭化物が付着している。色調は褐色を呈し，焼成は良好である。口径12cm。底径5cm。器高5cm。5は胴部上半が欠損している。内外面に炭化物が付着している。底径5.4cm。

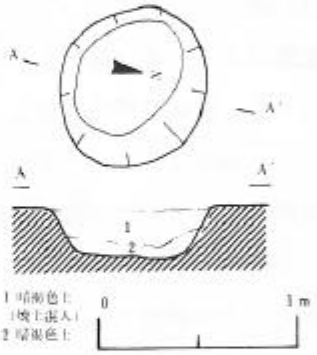
コップ形土器（6）　巻上げ成形されたと考えられる。胴部がわずかにふくれるがコップ状を呈する。全体的に黒褐色を呈し，焼成・胎土ともあまりよくない。口径7cm。底径5cm。器高7.8cm。

〔須恵器〕　**椀形土器**（7）　7は椀形土器の底部であろう。底部には，0.2cmほどの細い粘土紐を張り付け，高台を作出している。

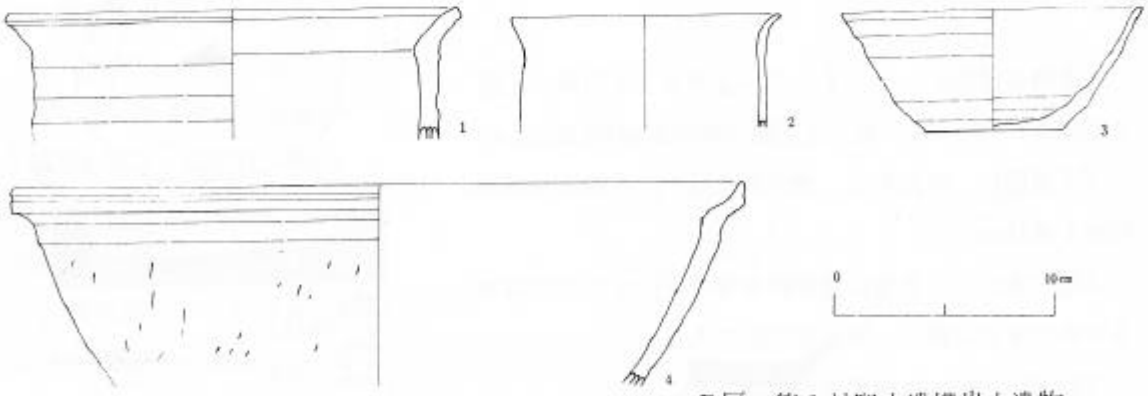
甕形土器（8）　8は甕形土器の胴部破片であると思われる。内外面ともにタタキ痕を有する。青灰色を呈し，焼成・胎土とも良好である。

第1号竪穴遺構（第17図）

〔遺構の確認〕　5－fグリッドで検出された。第1号竪穴住居跡の南約2mの位置にある。遺構確認面は，



B区　第1号竪穴遺構
第　17　図



B区　第1号竪穴遺構出土遺物

第　18　図

地山上面である。

〔平面形〕　平面形は，円形を呈し，径75cmほどである。

〔壁・床面〕　壁は，全体的にゆるやかに床面に続く。床面は平坦である。深さは25cmほどである。

〔柱穴〕　検出されなかった。

出土遺物（第18図）

出土遺物は土師器で，甕形，杯形，鉢形土器がある。

甕形土器（1，2）　1も2も口縁部破片である。1は，口縁部が「く」の字に外反し，口唇部は平坦に仕上げられている。器面はロクロ調整されている。色調は，赤褐色を呈し胎土には砂礫を含む。推定口径20cm。2は器壁が0.3cmと薄く，口縁部は外反する。色調は褐色を呈する。推定口径12cm。

杯形土器（3）　3は杯形土器の破片である。ロクロ水挽き成形され，底部には回転糸切り痕が認められる。色調は褐色を呈し，外面に炭化物が付着している。推定口径と底径は，13.5cm，6cmであり，器高は5.5cmである。

鉢形土器（4）　4は土鍋状を呈する鉢形土器の口縁部破片である。口縁部は内彎気味に外反する。口唇部は　断面三角形に仕上げられる。口唇部下部の外面には，一条の沈線がめぐる。口縁部外面はロクロ調整され，胴部は縦方向のヘラ削り調整されたようである。胎土には多量の砂礫を含む。色調は赤褐色を呈する。推定口径33cm。

第2号竪穴遺構（第19図）

〔遺構の確認〕　7－f，7－gグリッドの地山上面で確認された。第1号竪穴住居跡の南約5mの位置にある。

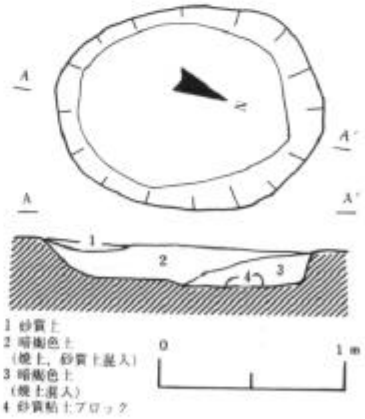
〔平面形〕　平面形は，楕円形を呈し，長軸1m45cm短軸1m10cm。

〔壁・床面〕　北壁は急傾斜をなすが，全体的にはゆるやかに床面に続く。床面は平坦である。

〔柱穴〕　柱穴は検出されなかった。

出土遺物（第20図）

出土遺物は，土師器甕形土器と羽口である。



B区　第2号竪穴遺構

第　19　図

甕形土器（1）　1は，甕形土器の口縁部破片である。輪積み成形ののち，ロクロで器面調整を行なっている。口縁部は外反し，口辺部は垂直に立上がる。色調は明褐色を呈し，胎土には砂礫を含む。推定口径22.5cm。

羽口（2）　土製の羽口で，ほぼ半分欠損している。現存する長さは14cm。断面は方形を呈する。送風孔は円形で，径5cmである。胎土中にはスサと砂礫が混入されている。

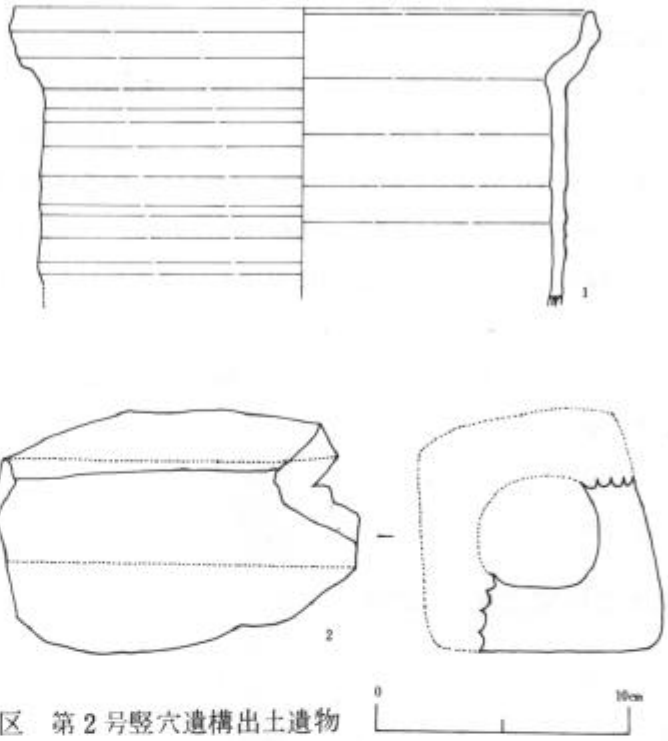
第3号竪穴遺構（第20図）

〔遺構の確認〕　遺構は，第2号竪穴住居跡と重複した状態で検出された。住居跡より時間的に新しいものである。

〔平面形〕　全体的には正方形に近い形をなすが，西壁や南壁は曲線を呈する。

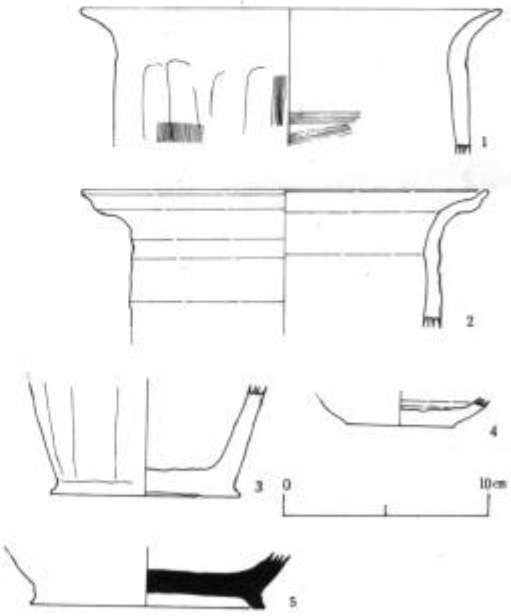
〔壁・床面〕　壁は，東壁が急であるが，ゆるやかに床面に続く部分もある。床面は，凹凸が激しい。

〔柱穴〕　遺構内には，P_5～P_7の柱穴状ピットが存在した。これらピットの地山上面よりの深さは，P_5が13cm。P_6が15cm，P_7が15cmである。



B区　第2号竪穴遺構出土遺物

第　20　図



B区　第3号竪穴遺構出土遺場

第　21　図

出土遺物（第21図）

出土遺物は，土師器甕形土器，杯形土器と須恵器である。

〔土師器〕　**甕形土器**（1～3）　1と2は口縁部破片であり，3は底部破片である。1は，口縁部が大きく外反し，口唇部は丸く仕上げられている。胴部外面は，ヘラ削り調整され，その上にハケ状工具による縦方向の調整が行なわれている。色調は赤褐色を呈する。推定口径20.5cm。2は口縁部が大きく外反し，口唇部は上方に立上がる。内外面ともロクロ調整されている。赤褐色を呈し，焼成は良好である。胎土には砂礫を含む。推定口径19.5cm。3は底部が外方に張出し，安定性がある。底部周辺はヘラ削り調整されている。底径9cm。色調は，外面が暗褐色，内面が黒色を呈する。

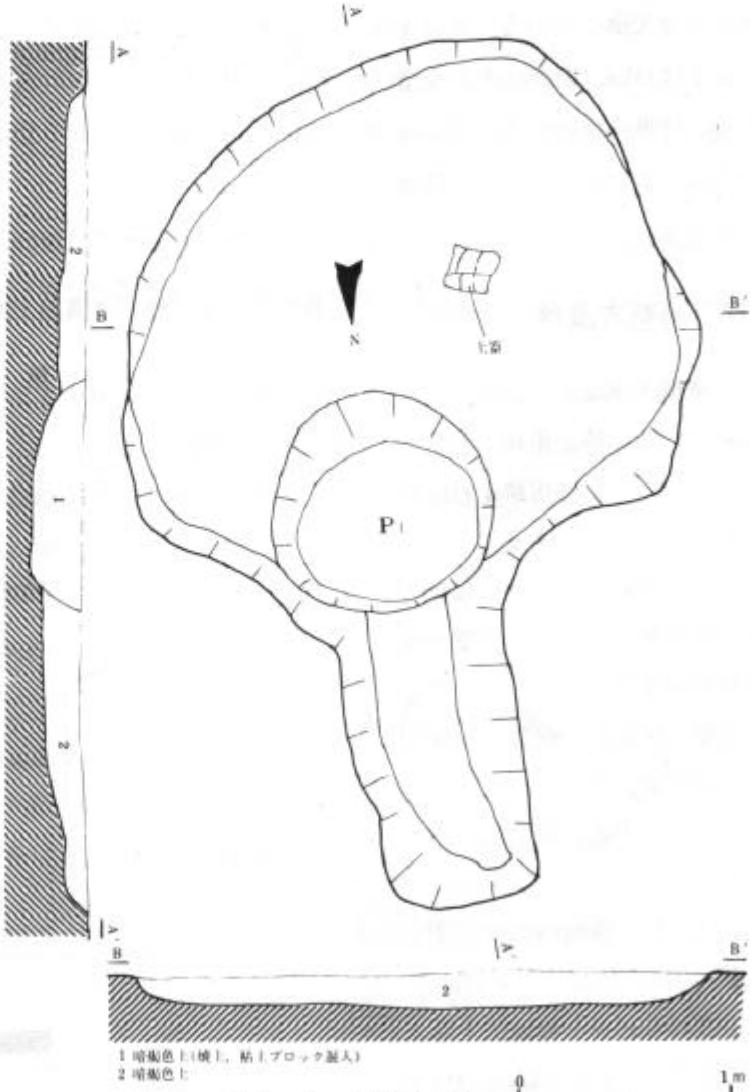
〔須恵器〕　5は甕形土器の底部破片と思われる。

第4号竪穴遺構（第22図）

〔*遺構の確認*〕　7－c，8－c，7－b，8－b，6－bグリッドで検出された。遺構確認面は，地山上面である。

〔平面形〕　平面形は，円形を呈するが，北方向に張出し部がある。円形部の径2m50cm。張出し部は，幅80cm，長さ1m40cmを測る。この張出し部は，入口だろうか。

〔壁・床面〕　壁高は10cmほどで，なだらかに床面に続く。床面は平坦である。遺構の北側床面にはP1が検出されたが，竪穴埋土上面から掘り込まれていたもので，本竪穴遺構よりは新しいものである。なお，炉跡らしい痕跡は検出できなかった。



B区　第4号竪穴遺構

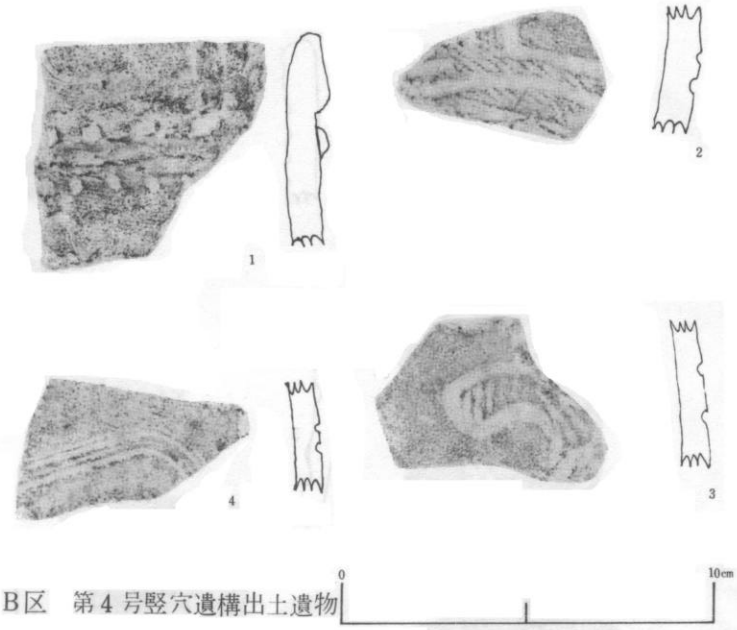
第　22　図

〔柱穴〕　柱穴は存在しなかった。

出土遺物（第23図）

出土遺物は，縄文土器片のみである。

縄文土器（1～4）　1は口縁部破片であり，他は胴部破片である。1は口唇部の外側から内側にかけて口縁に直角に粘土紐を張り付けている。粘土紐の張り付けは口縁部にも二条横位に施文されている。刺突文も二段みえる。円筒上層C式土器であろう。2と3には，太い沈線と磨消し縄文が施文され，4には細い4本の沈線が施文されている。



B区　第4号竪穴遺構出土遺物

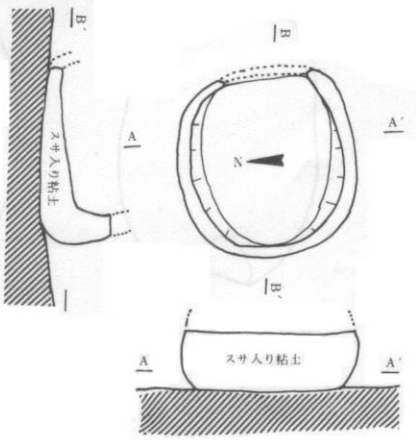
第　23　図

第1号製鉄遺構（第24図）

第1号竪穴住宅跡の東方約4 mのところで検出された。地山上面にスサ入り粘土で，側壁，床面を構築している。天井部が存在したかどうかは確認できなかった。現存する規模は，壁高15cm南北径48cm，東西径50cm，底部の厚さ4 cm～10cmである。なお，底部は傾斜していて，西側が高くて東側が低い。内部には鉄滓が充満していた。鉄滓はボロボロしたもので砕けやすかった。

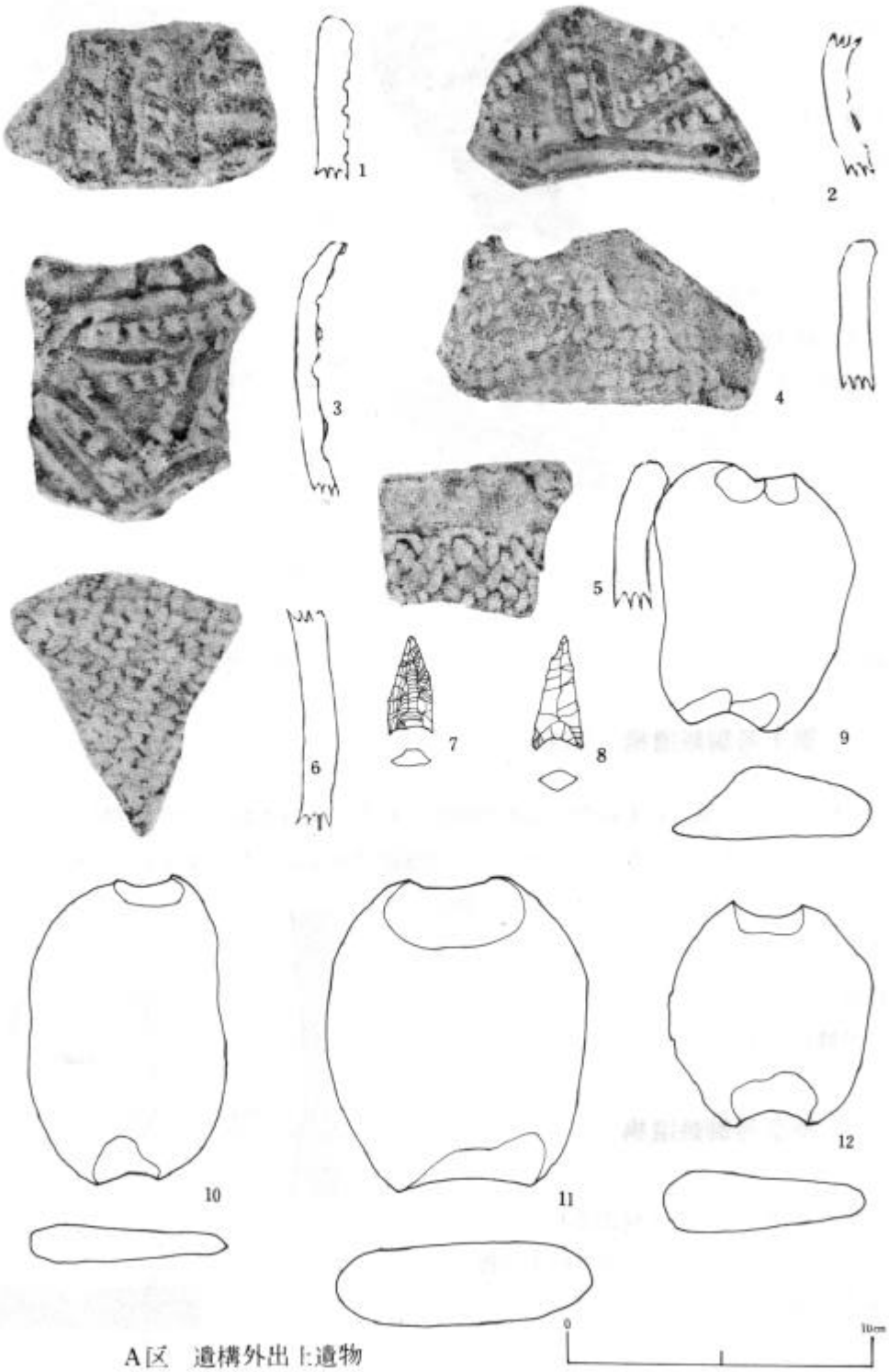
第2号製鉄遺構

第1号製鉄遺構に近接して検出された。現形をとどめないほど崩壊しており，スサ入り粘土が押しつぶされた状態で検出された。



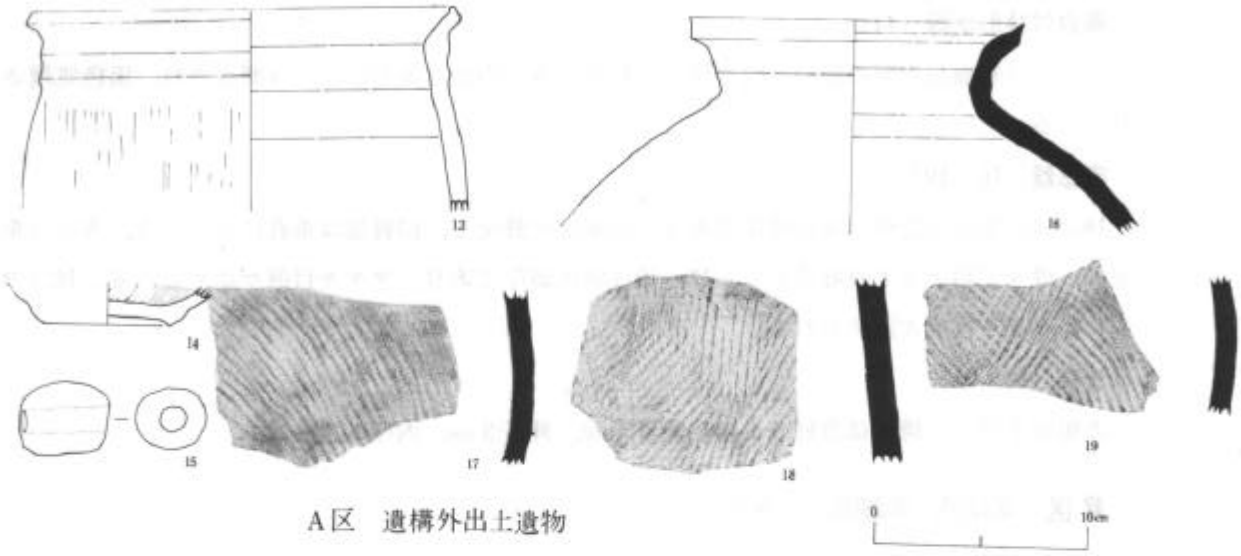
B区第1号製鉄遺構

第　24　図



A区　遺構外出土遺物

第 25 図



A区　遺構外出土遺物

第 26 図

V　遺構外の出土遺物

A区（第25図，第26図）

縄文土器（1～6）

〔a類〕　1～3・21は深鉢形土器の口縁部破片である。粘土紐張り付け文と刺突文が施文される。円筒上層C式土器であろう。

〔b類〕　4～6は，口辺部から胴部にかけて組紐縄文が施文されている。口唇部には刻み目文がみられる。

石鏃（7・8）

基部に凹部を作り出した石鏃で，頁岩を岩材としている。

石錘（9～12）

平扁な河原石の両端に凹部を作り出した切目石錘である。重量は，9が145 g，10が130 g，11が347 g，12が110 gである。

土師器（13・14）

甕形土器（13）

甕形土器の口縁部破片である。胴部は，ヘラ状工具で，撫でるように器面調整している。色調は明褐色を呈する。推定口径19.5cm。

高台付杯形土器（14）

底部には断面三角形の低い高台が付けられている。内面は縦方向にヘラ磨きされ，黒色処理されている。

須恵器（16～19）

16は広口壺形土器の口縁部破片である。口縁部が外反し，口唇部は垂直に立上がる。青灰色を呈し，焼成・胎土とも良好である。17～19は胴部破片であり，タタキ目痕が認められる。18は内面にもタタキ目痕が認められる。

土錘（15）

赤褐色を呈し，焼成は良好である。長さ4 cm，外径3 cm，内径1.2 cm。

B区（第27図，第28図，第29図）

縄文土器（1～12）

〔a類〕　表面は素文で，沈線のみが施文される。1・5～7がこの類に属する。1は底部を欠損しているが，円筒深鉢形土器である。口縁と胴部に2本の太い沈線がめぐる。この沈線間には2～4本の弧線，2～3本の直線が沈線で描かれている。色調は暗褐色を呈する。胴下半は二次的火熱を受け，褐色に変色している。口径22.5cm。推定器高34cm。

〔b類〕　磨消縄文の施文された土器で，2～4がこの類に属する。2は壺形土器である。胴部に最大径がある。底部から内彎しながら立上がる。口縁部はわずかに外反する。太い沈線間に縄文を残し，胴下半は磨消している。粗製の土器で，器面はボロボロしている。器高8 cm。3は深鉢形土器の胴部破片，4は口縁部破片であろう。

〔c類〕　8と10は浅鉢形状器の口縁部破片であり，撚糸圧痕文が施文されている。

〔d類〕　粘土紐の張り付けと刺突文が施文されている。9・11・12がこの類に属する。

a類，b類は縄文後期の土器であり，c類は大木7b式，d類は円筒上層e式土器である。

掻器（13）

剥片の周片を二次加工し刃部としている。惰円形を呈する。頁岩を原材としている。

トランシェ様石器（14）

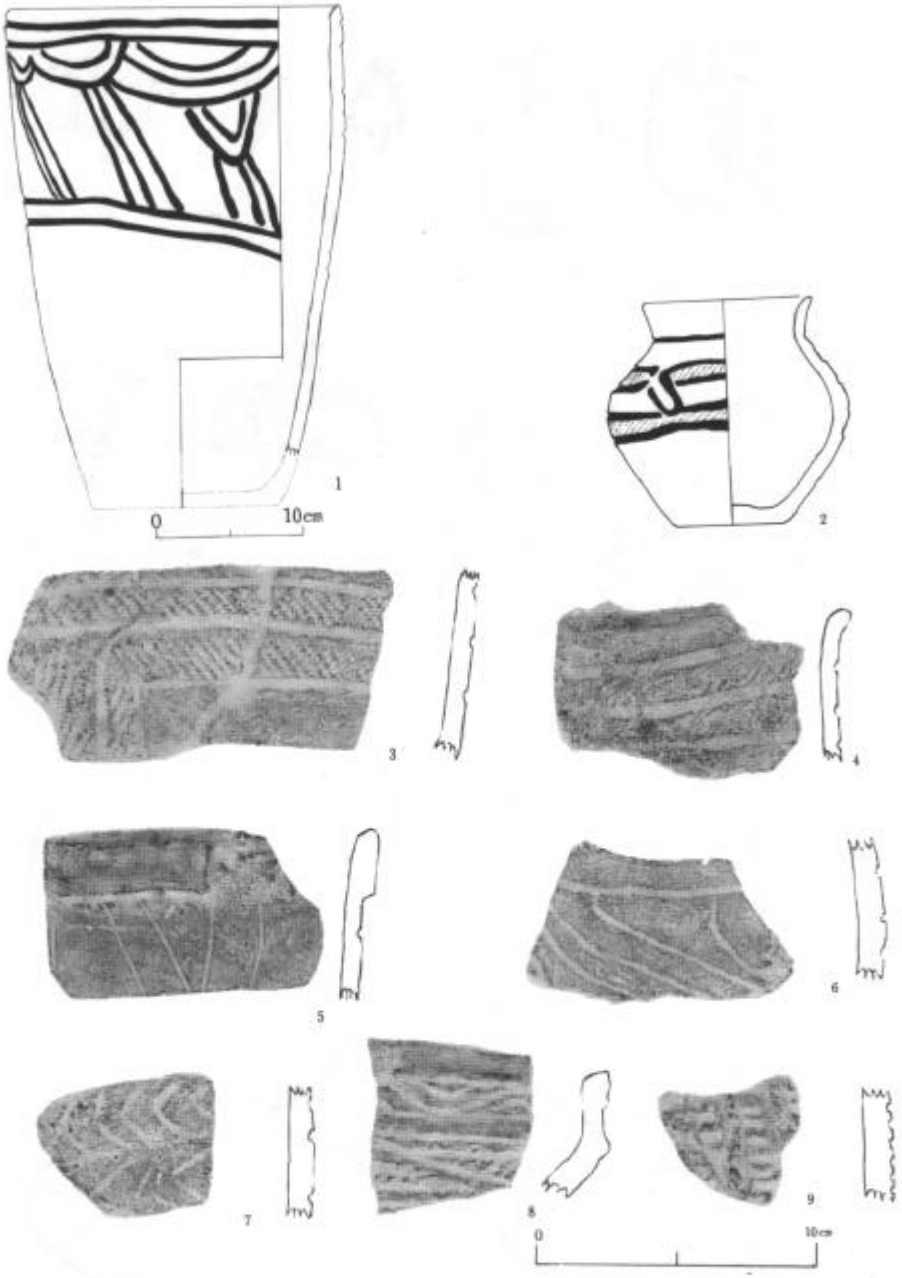
バチ形を呈する。頁岩を原材としている

石鏃（15・16）

15は有茎の石鏃であり，16は未完成品であろう。いずれも頁岩を原材としている。

石錐（17・18）

17は横剥ぎの剥片を利用している。いずれも頁岩を原材としている。



B区　遺構外出土遺物（1）

第　27　図

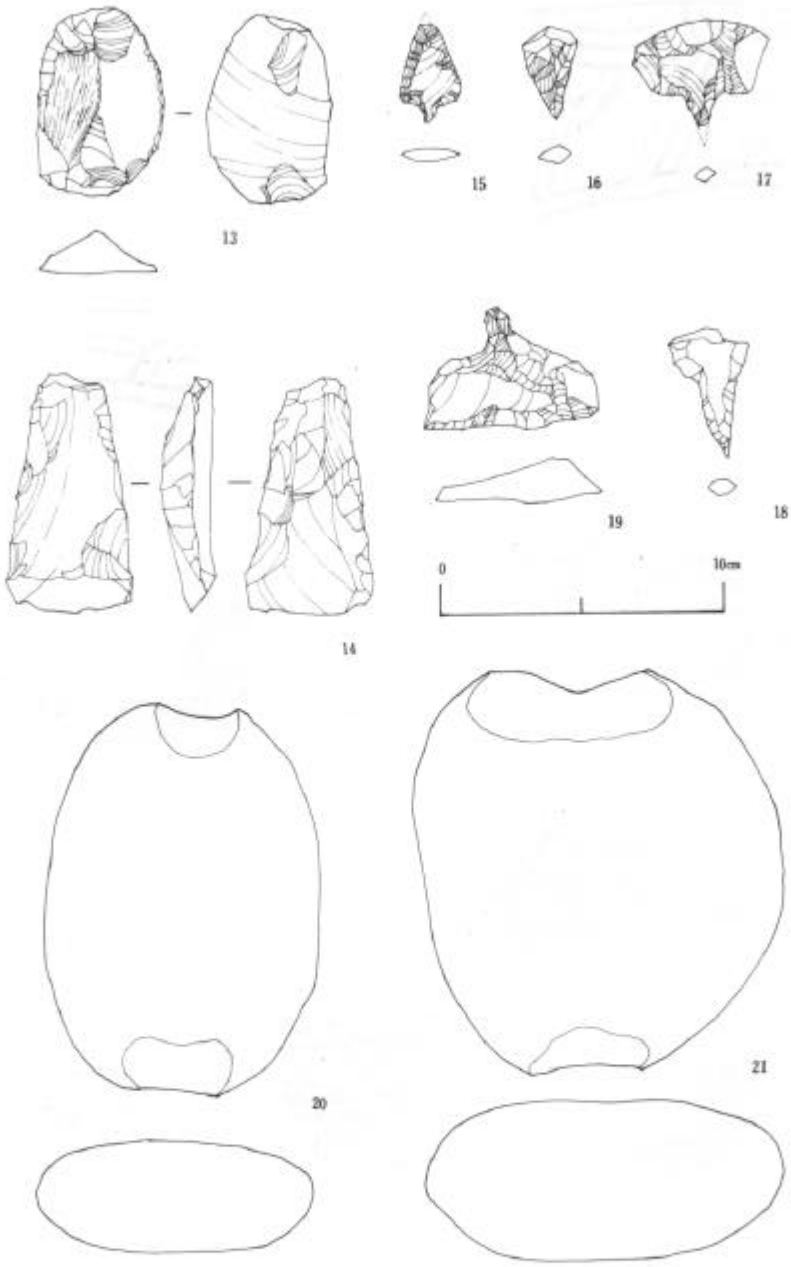
石匙（19）

横形の石匙であり，頁岩を原材としている。

石錘（20・21）

大型の石錘で，20が776 g，21が1340 g を測る。河原石の両端に凹部を作出した切目石錘である。

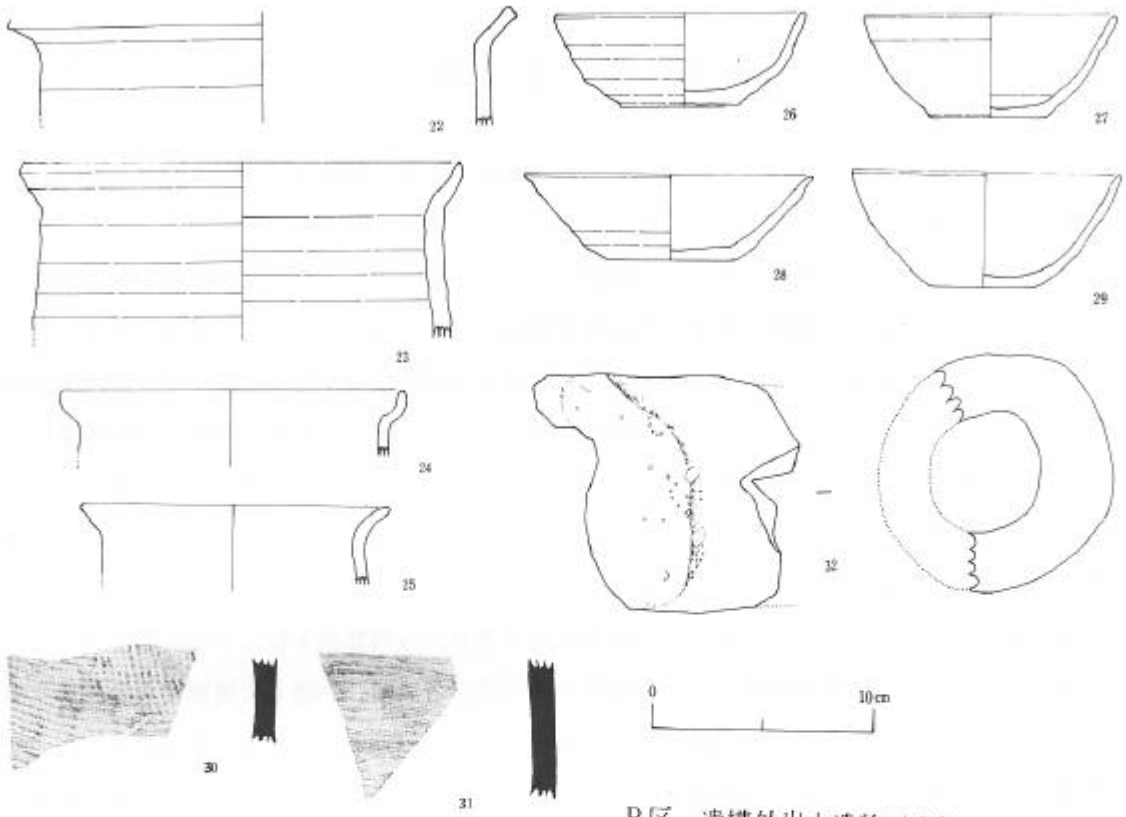
土師器（22～29）



第 28 図　B区　遺構外出土遺物（2）

甕形土器（22～25）

22・23は，口縁部が外反し，器面はロクロ調整されている。22の口唇部は平坦に作られ，23の口唇部は丸味を持っている。色調はいずれも褐色を呈する。22の外面には炭化物が付着している。24・25はやや小型である。24の口縁部は内彎気味に外反する。いずれも褐色を呈する。口辺部内面には炭化物が付着している。推定口径は，22が22cm，23が19.5cm，24が15cm，25が13.5cmである。



B区　遺構外出土遺物（3）

第 29 図

杯形土器（26～29）

いずれもロクロ水挽き成形され，底部の切離しは回転糸切り技法による。26は内　気味に立上がる。赤褐色を呈し，焼成は良好である。口径11cm。底径5.5cm。器高4 cm。27はやや内彎気味に立上がる。褐色を呈し，焼成は良好である。口径11.5cm。底径5.5cm。器高4.6cm。28の胴部は直径線的に開き，口縁部が外反する。色調は，外面が褐色，内面が黒色を呈する。口径13cm。底径5.5 cm。器高4 cm。29は内彎気味に開く。明褐色を呈し，焼成は良好である。口径12cm。底径5 cm。器高5.5cm。

須恵器（30・31）

甕形土器の胴部破片であろう。タタキ目痕が認められる。

羽口（32）

断面が円形を呈する羽口破片である。外径10.6cm。内径5.2 cm。外面には溶融した鉄滓が付着する。

Ⅵ まとめ

今回の調査で検出された遺構は，住居跡4，竪穴遺構7，製鉄遺構2であった。このうち，B区第4号竪穴遺構だけ縄文時代に属し，他は平安時代の遺構である。

住居跡は4棟検出され，規模，カマドの構築の仕方などから考えると，第1号住居跡と第2号住居跡が類似し，第3号住居跡と第4号住居跡が類似する。2棟単位で集落が構成されていたかのようにも考えられるが，いずれも回転糸切り痕を有する杯形土器が出土していて，時間的差は認められない。今回の調査で特筆すべきは製鉄遺構の検出であろう。スサ入り粘土で構築され,なかに鉄滓が充満していた。この鉄滓はボロボロしているが，付近からアメ状を呈する鉄滓や，溶融した鉄滓の付着した羽口が出土していることから，小規模な野たたらの存在した可能性がある。類例は，能代市大館遺跡で検出されている。

円形，楕円形の竪穴遺構については，用途が不明であり，今後類例を待って検討してみたい。

なお，B区第4号竪穴遺構を除く，他の遺構の年代は，各遺構に共通した遺物である杯形土器から考えてみたい。土師器杯形土器は，ロクロ水挽き成形・回転糸切り技法による切り離し，底部周辺の非再調整などの共通した特徴をもっている。東北地方においては，このような土師器杯形土器は，表杉ノ入式として編年されている[7][8]。年代は10世紀前半を中心として9世紀後半から11世紀後半までというように考えられている。以上の研究成果を参考にすると，中台遺跡の住居跡，竪穴遺構の年代もまた平安時代前半を中心とするものであると考えられる。

《 註 》

(1) 大和久震平「能代市金山チャシ発掘報告」秋田県立鷹巣農林高等学校郷土史研究部報告第1冊（昭和32年）

(2) 秋田県教育委員会「能代山本地区広域農業建設に伴う発掘調査報告書—八森坂，南山の上，サシトリ台遺跡—」（昭和51年）

(3) 昭和47年に発掘調査されたが報告書は未刊である。

(4) 大和の震平「柏子所貝塚発掘調査報告書」（昭和41年）

(5) 能代市教育委員会「能代市大館遺構(野代営擬定地)」（昭和48年）　「大館遺跡発掘調査概報」（昭和49年）　「大館遺跡第4次発掘調査概報」（昭和50年）

(6) (5)に同じ

(7) 氏家和典「東北土器の型式分類とその編年」歴史第14輯（昭和32年）

(8) 岡田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における杯形土器の変遷」研究紀要1　多賀城跡調査研究所（昭和49年）

最後になりましたが，本報告書をまとめるにあたって，秋田県教育庁文化課富樫泰時，秋田城跡発掘調査事務所小松正夫，日野久，石郷岡誠一，大館市史編纂室板橋範芳，沢目中学校工藤英美の各氏に懇切なご指導とご教示をたまわった。また，発掘調査から遺物整理にいたるまで，東北農政局開拓建設事業所，能代市教育委員会からは，多大なご協力を得た。記して感謝の意を表するしだいである。

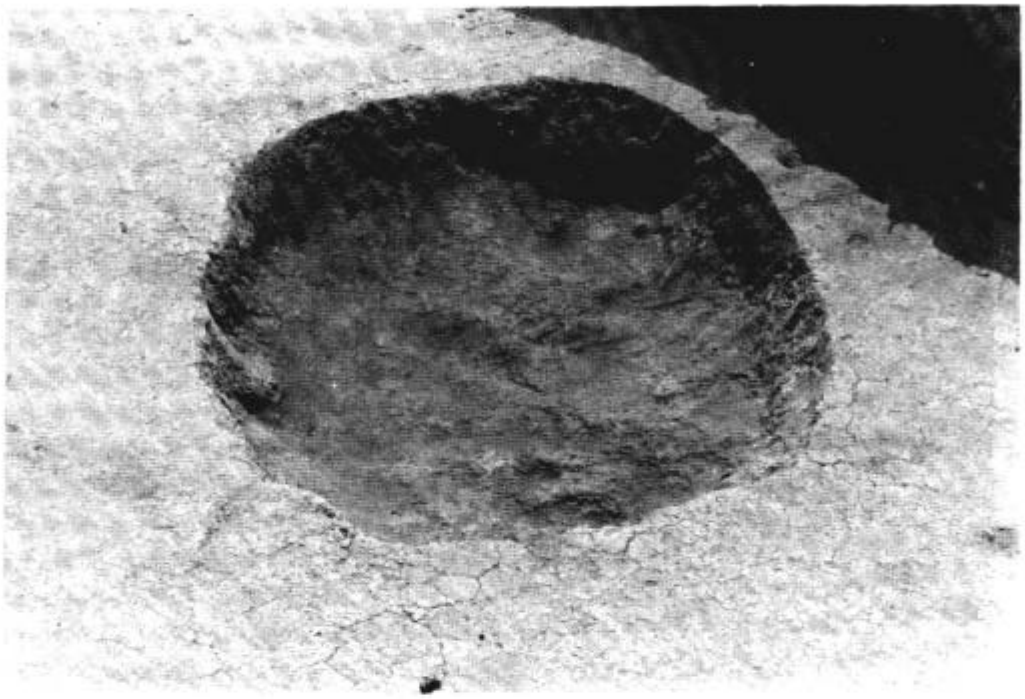
図版 1

遺 跡 遠 景

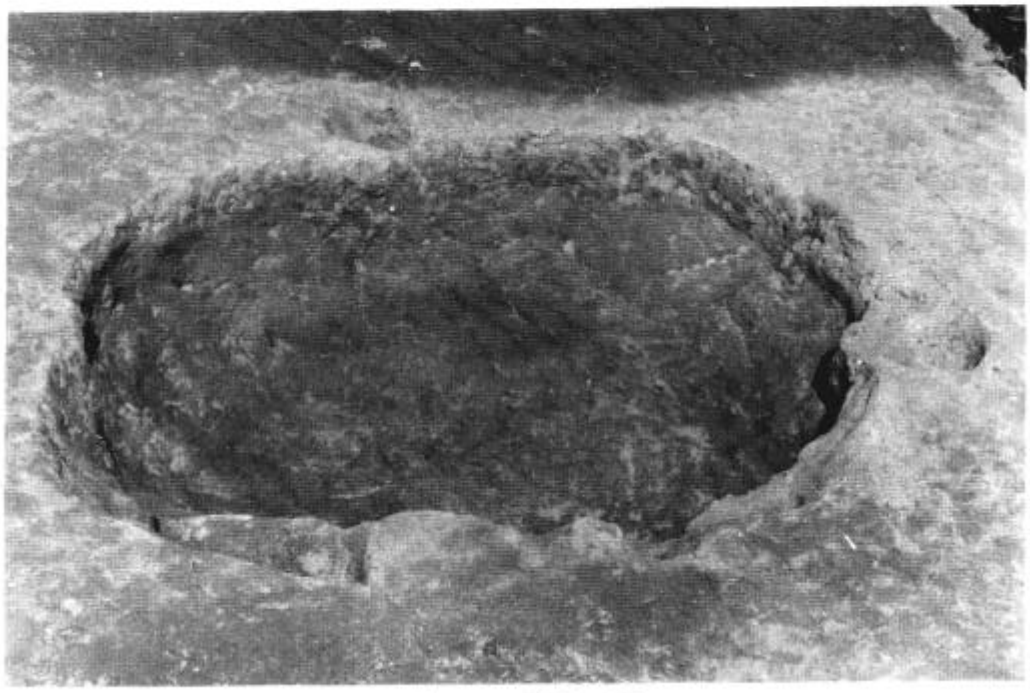
発 掘 前 の よ う す

発 掘 調 査 風 景

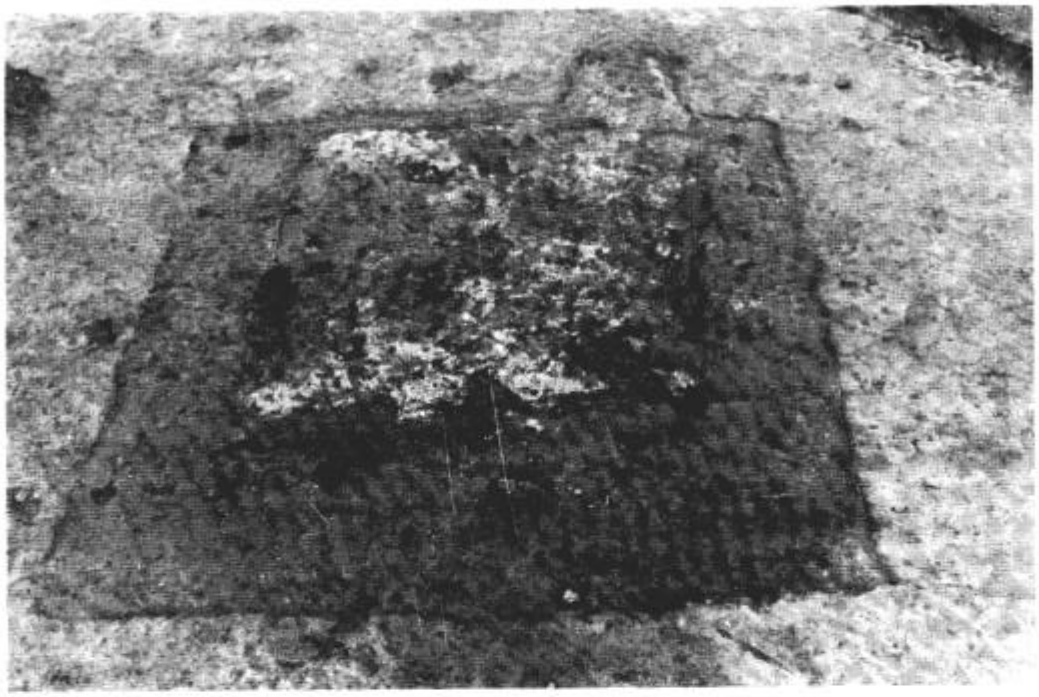
A区　第 1 号竪穴遺構



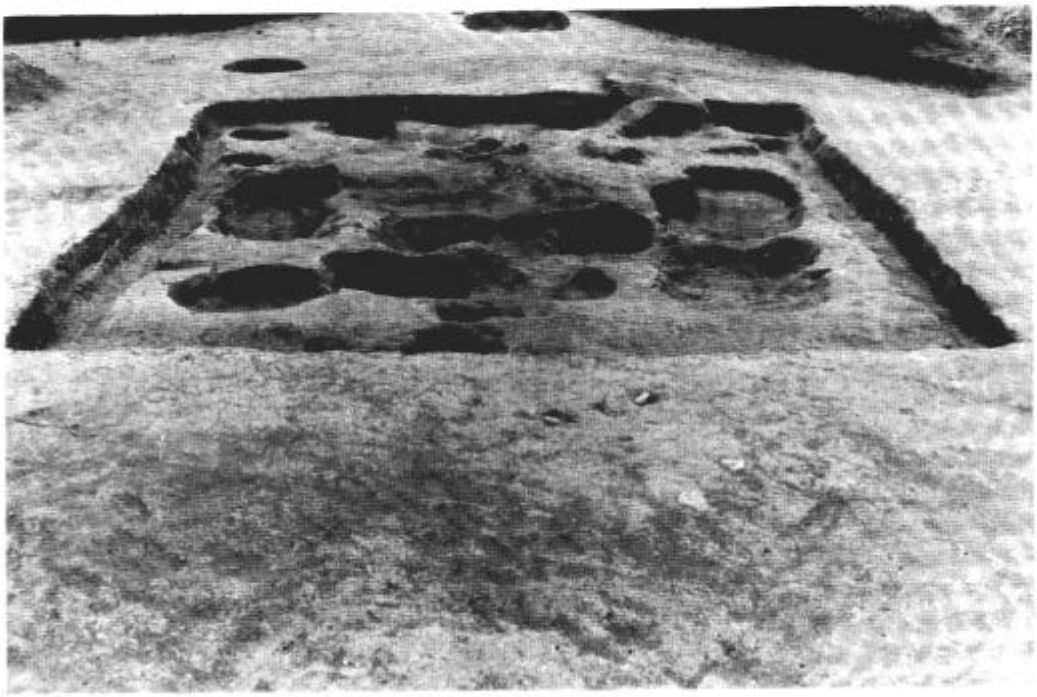
A区　第 2 号竪穴遺構



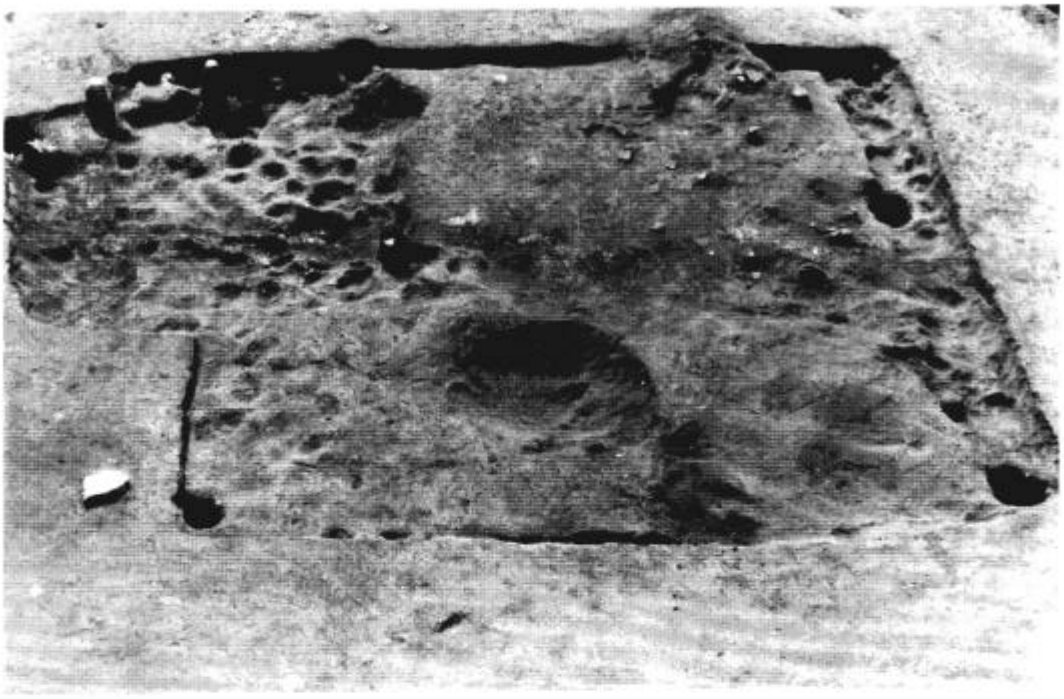
A区　第 3 号竪穴遺構



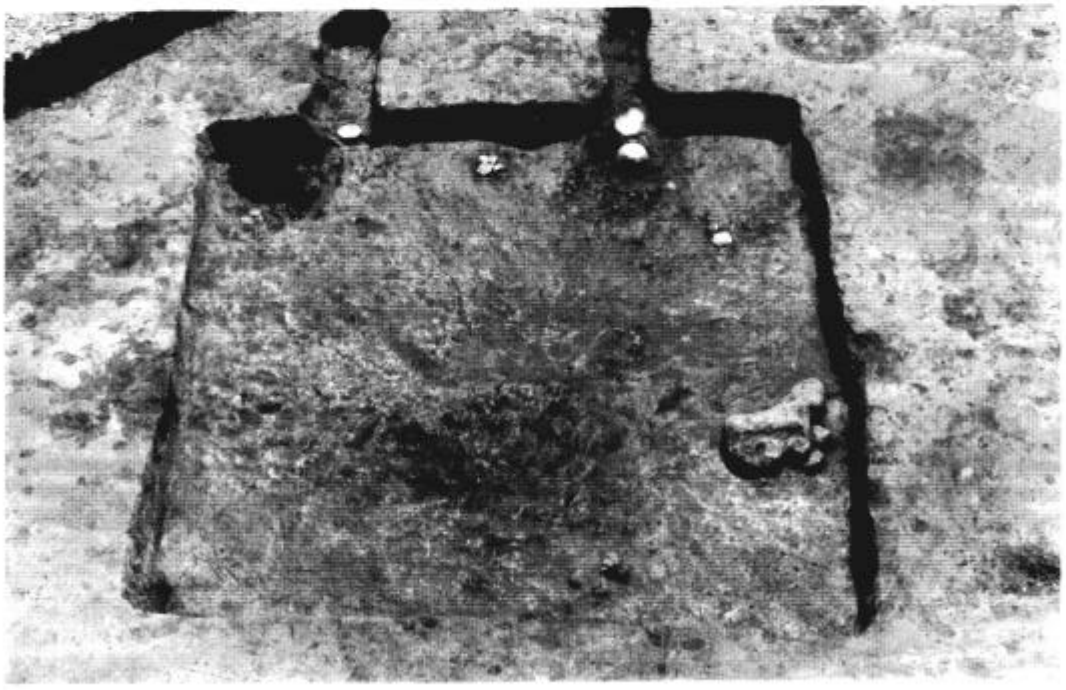
B区　第1号竪穴住居跡精査前



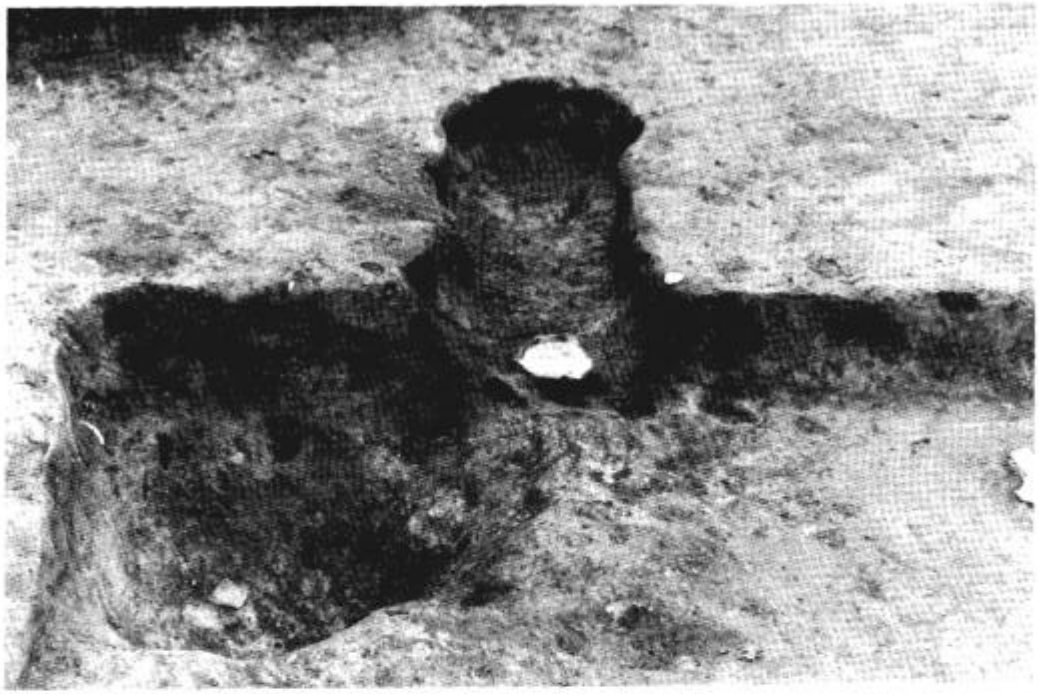
B区　第1号竪穴住居跡完掘



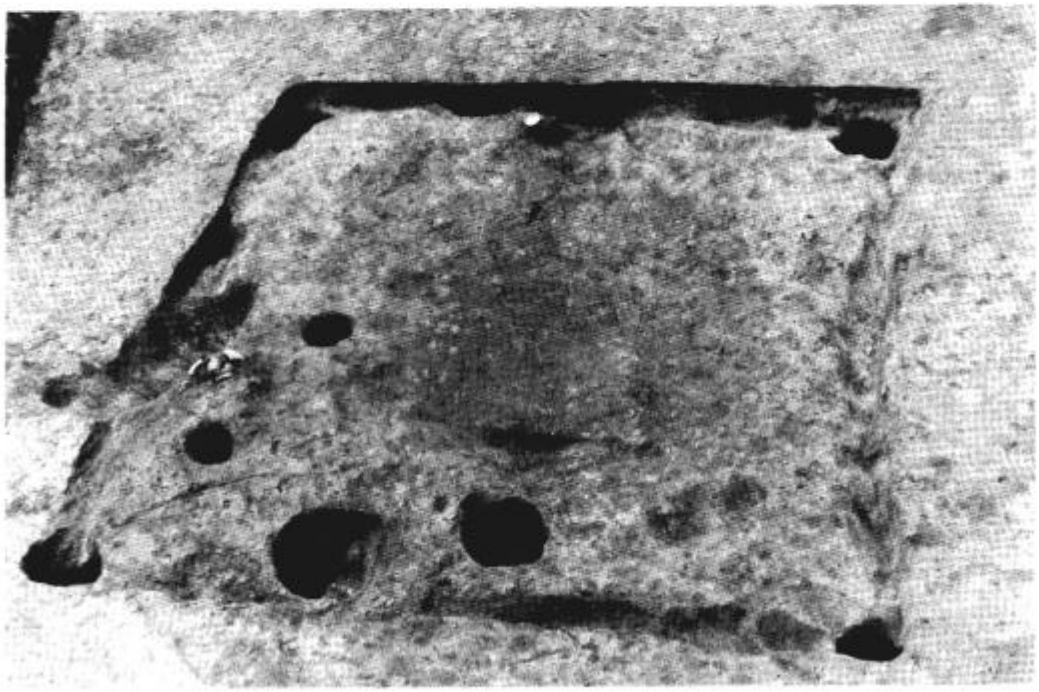
B区　第2号竪穴住居跡と第3号竪穴遺構



B区　第3号竪穴住居跡

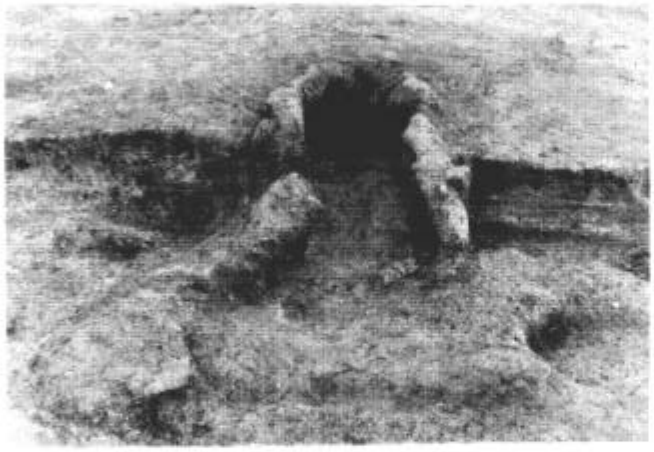


B区　第3号竪穴住居跡　カマド



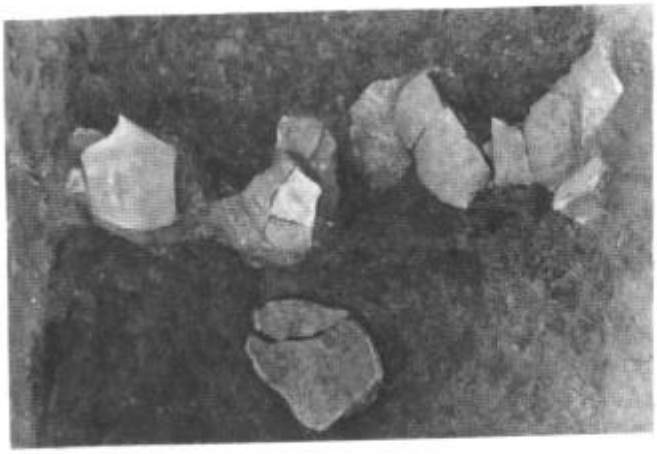
B区　第4号竪穴住居跡

B区
第1号住居跡
カマド



B区
第2号住居跡
カマド

B区
第3号竪穴住居跡
黄白色粘土

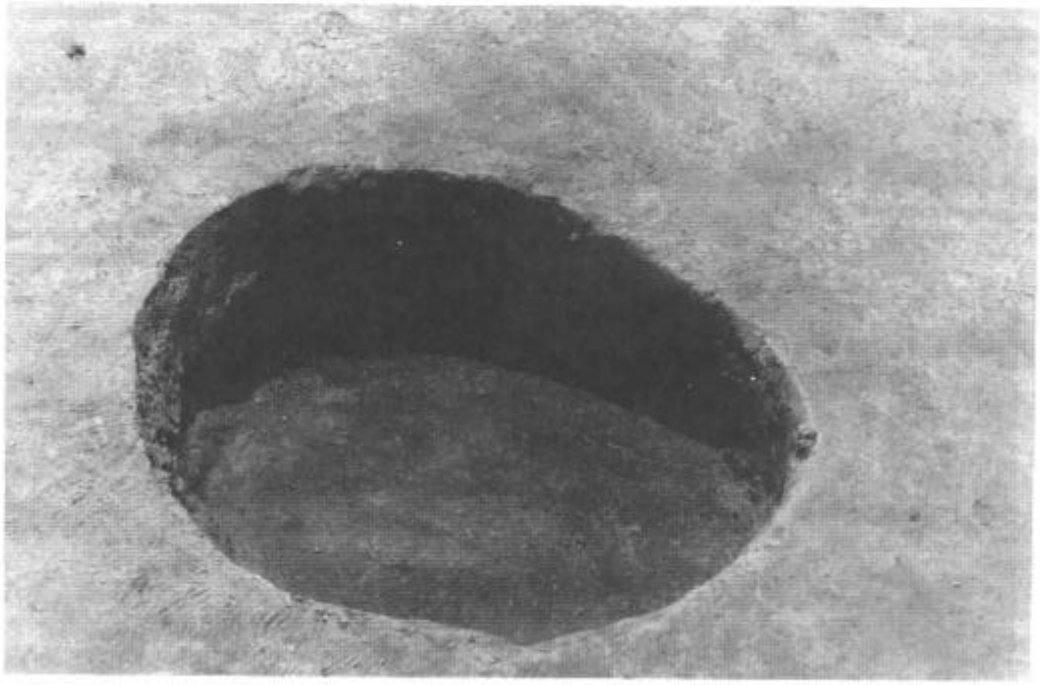


B区
第1号
竪穴住居跡
遺物出土状態

B区
第2号
竪穴住居跡
遺物出土状態

B区
第4号
竪穴住居跡
遺物出土状態

B区　第1号竪穴遺構遺物出土状態



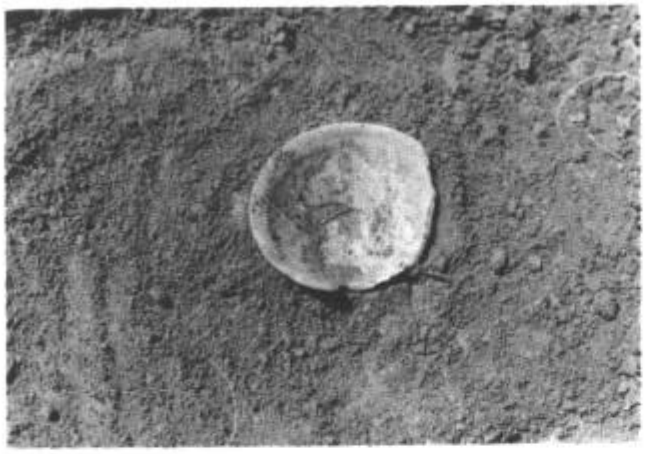
B区　第1号竪穴遺構

B区　第2号竪穴遺構

B区　第4号竪穴遺構

B区　第1号製鉄遺構（鉄滓が充満）

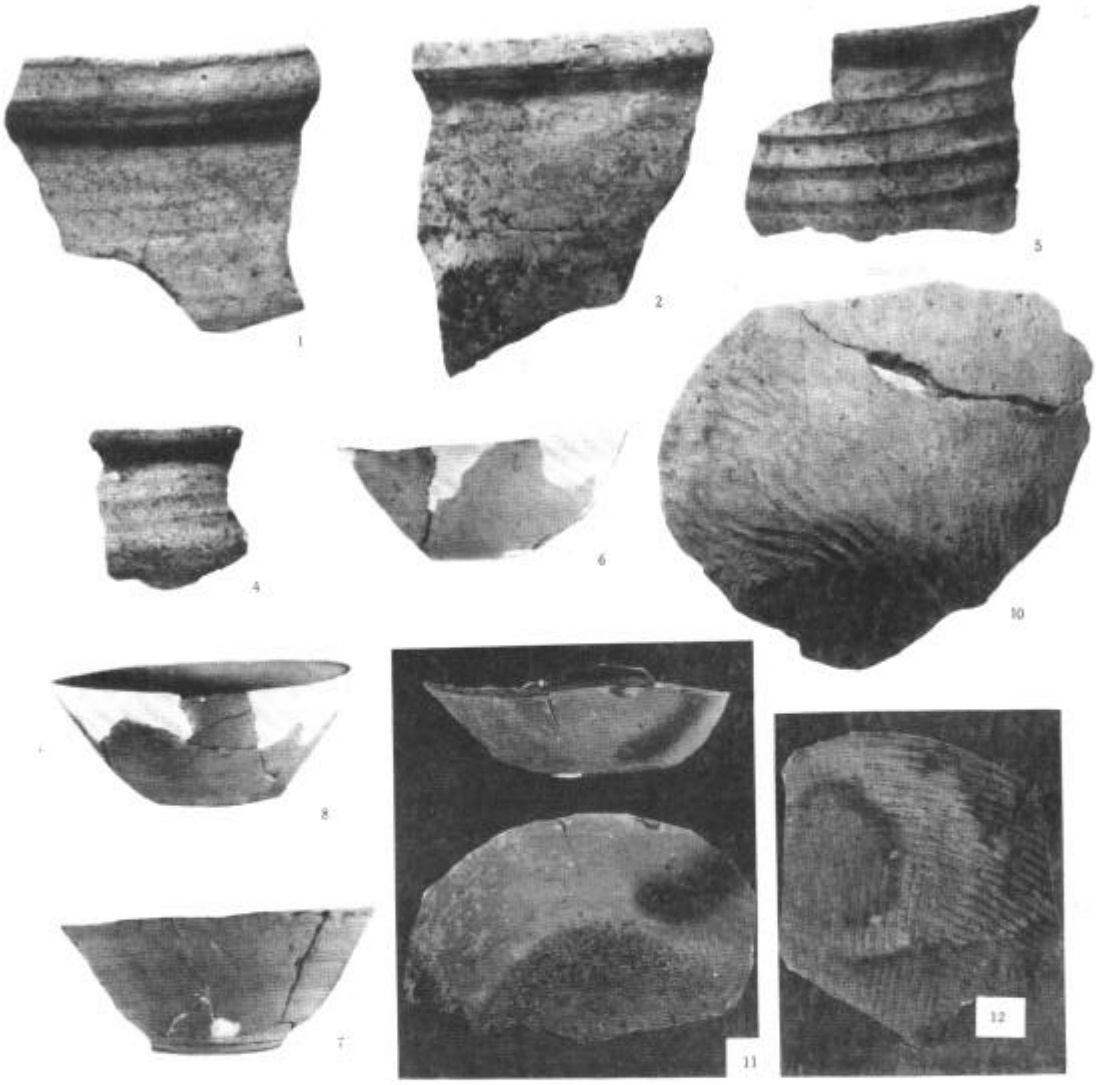
B区　第1号製鉄遺構（鉄滓を除去）



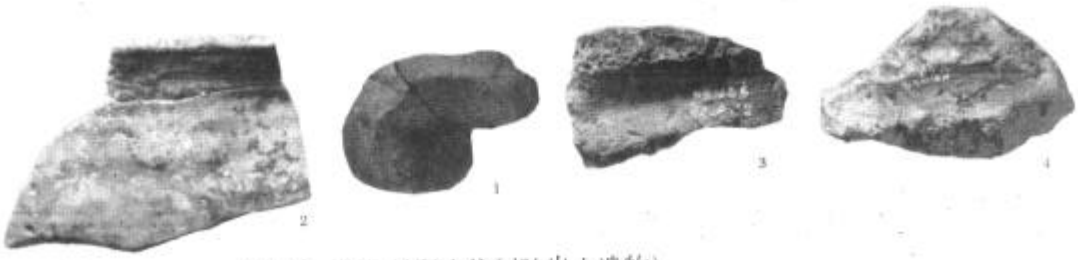
A区
杯形土器
出土状態

A区
石鏃
出土状態

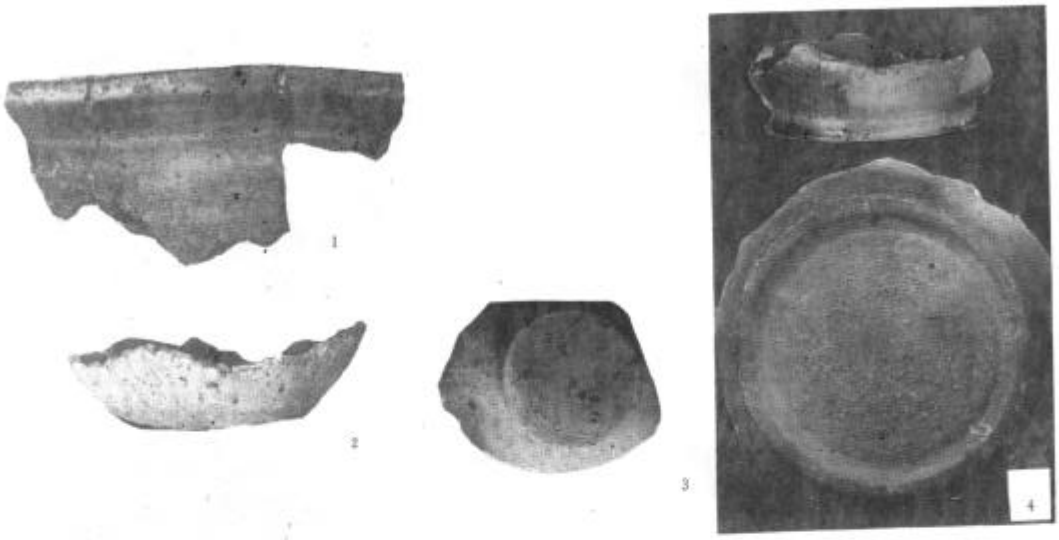
B区
石錘
出土状態



（B区　第1号竪穴住居跡出土遺物）

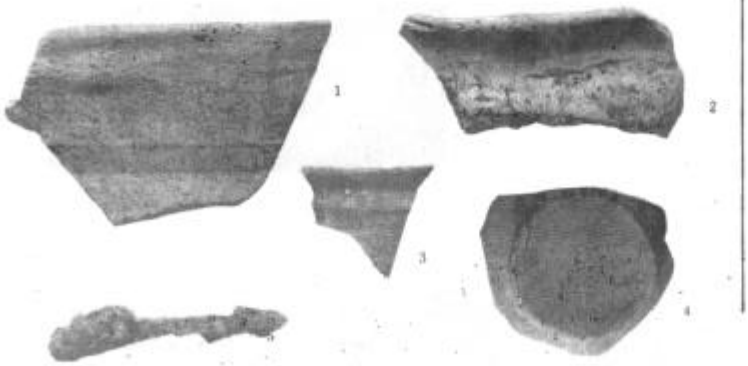


（B区　第2号竪穴住居跡出土遺物）



（B区　第3号竪穴住居跡出土遺物）

（B区　第4号竪穴住居跡出土遺物）

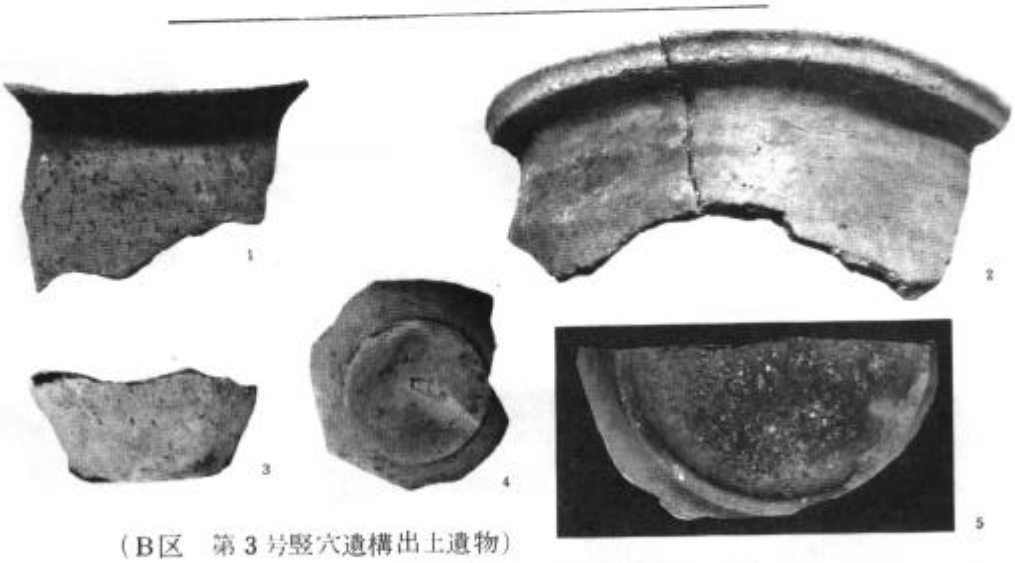


（A区　第1号竪穴遺構出土遺物）

（A区　第2号竪穴遺構出土遺物）

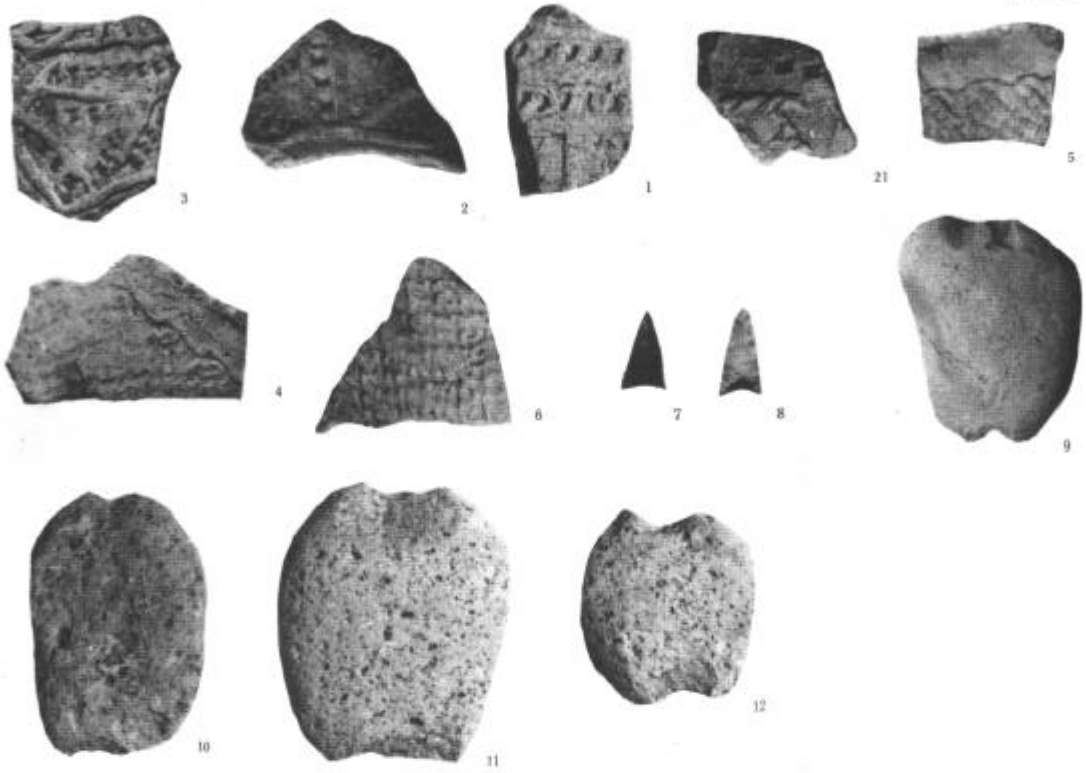
（B区　第1号竪穴遺構出土遺物）

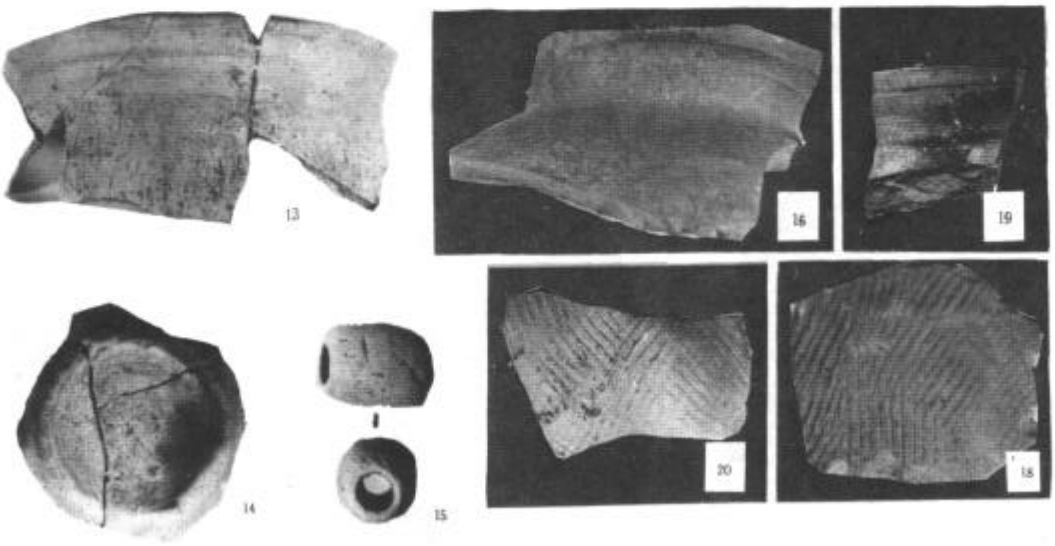
（B区　第2号竪穴遺構出土遺物）



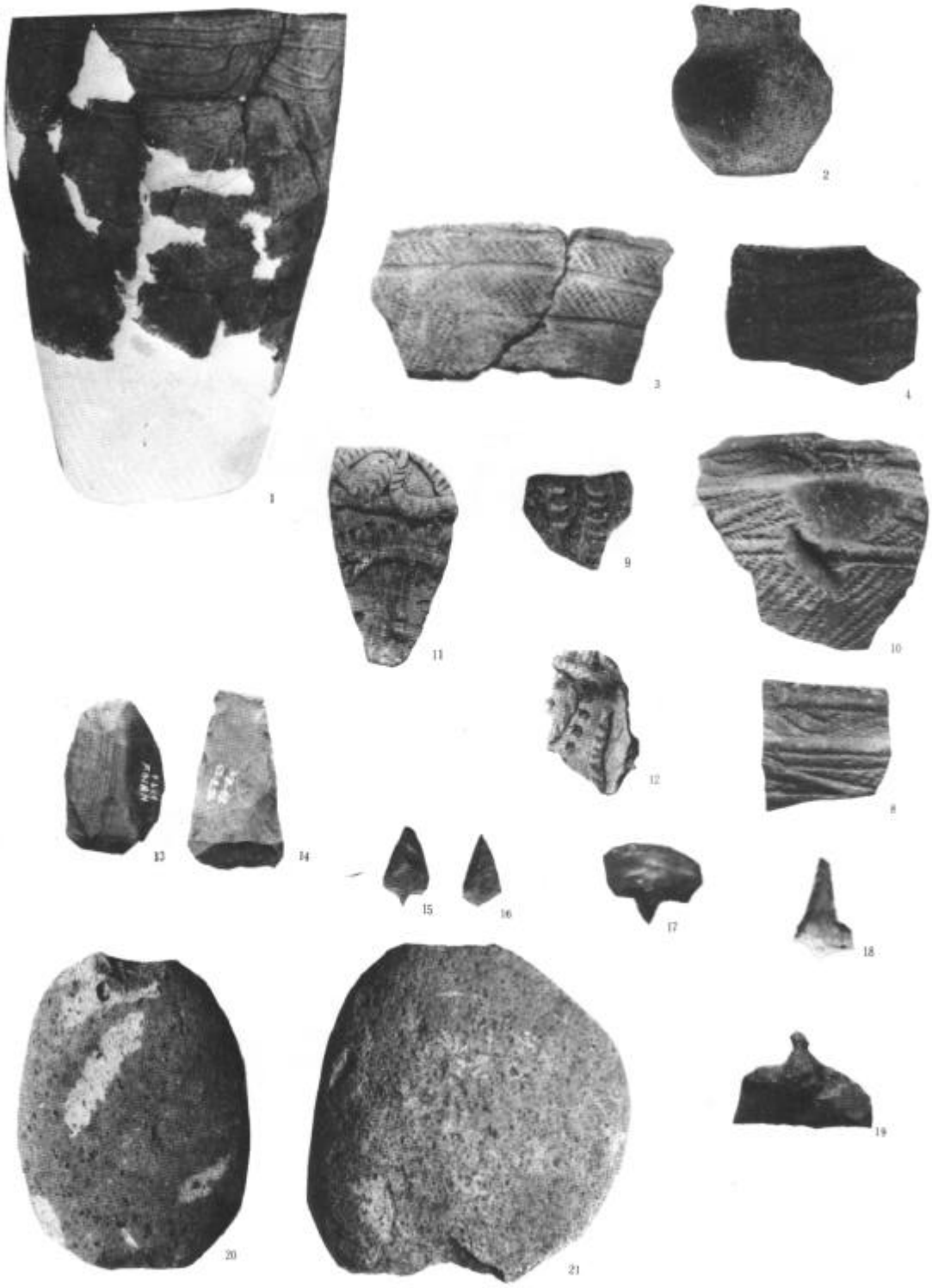
（B区　第3号竪穴遺構出土遺物）

（B区　第4号竪穴遺構出土遺物）

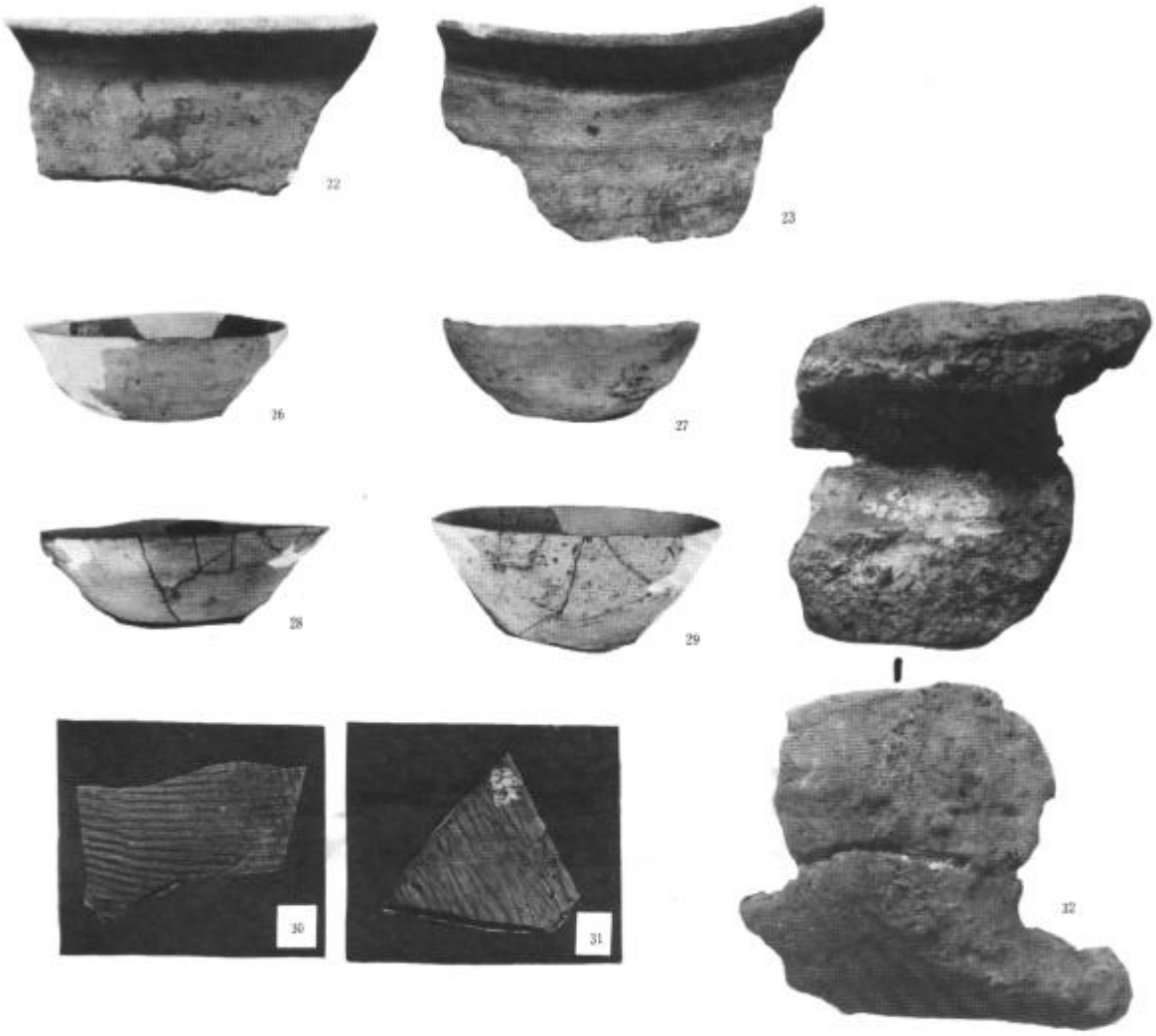




（A区遺構外出土遺物）



B区遺構外出土遺物(1)



B区遺構外出土遺物(2)